



都市文化研究センター (UCRC) の 全体的な活動とスタッフ

仁木宏 (文学研究科教授, UCRC副所長)

2007年4月, 都市文化研究センター (Urban-Culture Research Center, 以下, センターと略) が新生して以降, センターでは, 先端レベルの研究成果を生み出し, 大阪市立大学大学院文学研究科を世界最高水準の研究・教育拠点にするための活動を展開してきた。

具体的には, 文学研究科における共同研究を主導するとともに, 文学研究科に関係する大学院生, 若手研究者に対して高度な教育・研究支援を行うこと, 文学研究科教員に利便性の高い研究支援方策を提供することなどを目的としている。

そのため第一に, 大阪市立大学の学内競争的資金の一つである「重点研究」に応募し, 研究資金を獲得して多角的, 機動的な研究活動を行ってきた (「アジア海域世界における都市の文化力に関する学際的研究」, 2008~2012年度, 研究代表者: 井上徹教授)。また, 今年度新たに, 別の学内競争的資金である「都市問題研究」に応募し, 採用された (「『住みごたえのある町』をつくるー大阪・ハンブルクにおける市民文化に基づくエリアマネジメントー」, 2009~2011年度, 研究代表者: 大場茂明教授)。

さらに, 近い将来, 文学研究科あるいはセンターとしてG-COE (ないしその後継の競争的資金) へ申請する基礎条件を充実させるため, 科学研究費補助金などへの応募にセンターとして取り組んだ。

大学院学生・ODなど若手研究者に対する支援事業としては, 国際発信力育成インターナショナルスクール (IS) を開催し, 国際学会における英語での学術発表, 国際学会誌への英文投稿などの技術力養成につくした。なお, 本事業は, 文部科学省「大学院教育改革支援プログラム」の指定を受けている (2009年度まで)。

また, UCRCドクター研究員制度を継続し (「表2009年度ドクター研究員一覧」参照), 学位取得の促進, 研究環境の整備につとめた。さらに意欲的な研究員には, ドクター研究員プロジェクトによって研究資金を提供したり, 科学研究費を申請するための技術的なアドバイスをを行っている。企業・財団などによる研究・留学

資金提供についても恒常的に情報提供してきた。なお, ISやドクター研究員制度は文学研究科以外にも門戸を開いており, 学内他部局や学外よりの参加者も少なくない。

教員への研究支援策としては, 科学研究費申請を後援する事業を今年度も実施した。最新の研究成果を市民に還元する事業として, 上方文化講座を継続して開催した。学術情報総合センターのサブセンターが文学部棟から撤退したため, その跡地 (L201号室) を「文カフェ」 (仮称) と名づけ, UCRCとして改装, 有効活用の方策をねった。UCRCのオフィスも同室に移転した。

以上のようなセンターの研究成果を発信するため, 文学研究科叢書の刊行に引きつづき努力した。若手研究者の発表機会を提供するために雑誌『都市文化研究』を編集・発行した。さらに, 電子 (英文) ジャーナルの創刊準備作業を進めた。

■スタッフ

センターの運営にあたる教員スタッフ (コアメンバー) は以下の通り。(順不同)

所長: 中川眞教授 (アジア都市文化学)

副所長 (事務局長): 仁木宏教授 (日本史学)

常任研究員: 井上徹教授 (東洋史学), 塚田孝教授 (日本史学), 水内俊雄教授 (地理学), 土屋礼子教授 (社会学), 石田佐恵子教授 (社会学), 多和田裕司教授 (アジア都市文化学), 山崎孝史教授 (地理学), 村田正博教授 (国文学), 大場茂明教授 (地理学), 平田茂樹准教授 (東洋史学), 久堀裕朗准教授 (国文学)

この他, ドクター研究員もスタッフとして研究活動に参加しており, 研究履歴となる。

●センター会議の開催

第15回 2009年4月6日

第16回 2009年5月8日

第17回 2009年6月12日

第18回 2009年7月10日

●UCRCのホームページ

<http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/UCRC/>

国際発信力育成 インターナショナルスクール

添田晴雄 (文学研究科准教授)

2009年度のIS集中科目では, 海外から3人の講師を招聘し, 「国際都市社会論II」 (文学研究科共通科目, 文学部共通科目) として実施された。それぞれ午前中は講師による講義と質疑応答が英語で行われた。今年度も神

戸女学院の協力による英語と日本語双方向の同時通訳を利用した。また、午後は大学院生が英語で研究発表を行い、質疑応答の後、外国人講師から助言をいただいた。プログラムは次のとおりである。

9月15日(火)

【午前の部】 総合司会：山崎孝史教授

あいさつ 村田正博教授(文学研究科長)

講義 姜明求 Myung Koo Kang 教授 (Seoul National University, Korea) Representing Family and Family Relations in East Asian Television Dramas: Historical Variations among Confucian Cultures

【午後の部】 座長：土屋礼子教授, 田中孝信教授

篠田宗明(英語英米文学) Maggie's Struggle in Mill on the Floss (Mill on the Floss における Maggie の苦闘)

玉森彩弥香(英語英米文学) Elizabeth Gaskell's Cranford: Idealized Spinners (理想化されたスピンスターたち)

小林聡明(UCRCドクター研究員) Korean Border-Crossing and the Media during the US Occupations of Southern Korea and Japan, 1945-1948 (米軍占領下南朝鮮と日本における越境する朝鮮人とメディア)

助言者：Barbara Jones 非常勤講師(大阪市立大学)

9月16日(水)

【午前の部】 総合司会：野末紀之准教授

講義 レイボン・フーシェ Rayvon David Fouche 准教授 (University of Illinois at Urbana-Champaign, the USA) Hip Hop, Technology and the Circulation of Cultural Knowledge Across the Pacific

【午後の部】 座長：小田中章浩教授

野田はるか(表現文化学) Representation of "Homme de Sport" in the Corporeal Mime (コーポリアル・マイムにおける「運動する人間」の表現)

矢田尚也(心理学) The Role of Emotions in Occurrence of Compensation in Person-Perception (対人認知における相補性の生起過程に関する研究—感情の役割)

鈴木文子(心理学) The Media's Role in the Formation of Attitudes toward Gay Men and Lesbian Women (同性愛者への態度形成におけるメディアの役割)

助言者：レイボン・フーシェ Rayvon David Fouche 准教授 (University of Illinois at Urbana-Champaign, the USA)

9月17日(木)

【午前の部】 総合司会：山崎雅人准教授

講義 スパコーン・ディサタプンデユ Suppakorn Disatapundhu 准教授 (Chulalongkorn University, Thailand) Cultural Tourism

【午後の部】 座長：山崎孝史教授, 小牧龍太 (University of Illinois)

高崎章裕(地理学) Nonpolitical Environmental Movement: A Case Study of the Kuma River Basin in Japan (球磨川流域における非政治的な環境運動)

高崎章裕(地理学) Nonpolitical Environmental Movement: A Case Study of the Kuma River Basin in Japan (球磨川流域における非政治的な環境運動)

岡戸香里(アジア都市文化学) A Man Acted by a Woman: An Example in a Javanese Dance-Drama (女が演じる男—ジャワ舞踏劇における一例—)

助言者：レイボン・フーシェ Rayvon David Fouche 准教授 (University of Illinois at Urbana-Champaign, the USA)

集中科目実施日の直前になりソウル大学の姜明求教授の来日がかなわなくなるというハプニングがあったが、ソウル大学とIS集中科目の教室とをテレビ会議システムで接続し、遠隔で講義を行うことができた。また、午後の大学院生の研究発表における助言は Barbara Jones 非常勤講師(大阪市立大学)に急遽お願いすることになった。

これまでIS集中科目の講師招聘者については、文学研究科の教員の研究ネットワークを駆使して毎年対象者を探してきたが、大学院GP終了後も継続的にIS集中科目を実施していくために、今年度から3人の外国人講師のうち2人については、講師派遣を毎年依頼するための協力大学を設定することになった。このためのパートナー大学として、タイのチュラロンコン大学と米国のイリノイ大学を選定し、2008年度末に担当者を両大学に派遣して、両大学から毎年講師の推薦を行っていただく協力体制を確立した。

イリノイ大学からは、講師のフーシェ准教授に加えて、イリノイ大学の大学院生小牧龍太氏も招聘した。また、集中科目に先立ち、本研究科大学院生によりフーシェ准教授の著作の読書会が開催され、それに基づいて9月18日に高原記念館学友ホールにて、フーシェ准教授と小牧氏と共に研究会が実施された。

第一部 ワークショップ：都市とメディア

読書会報告(報告者：安部彩香), 研究報告(発表者：小牧龍太), 話題提供(発表者：川口夏希, 石川優, 山口晋), 全体討論と総括

第二部 留学セミナー：大学院留学の現在

大学院留学体験談（発表者：小牧龍太）、質疑応答
 コメンテータ：レイボン・フーシェRayvon David
 Fouche 准教授

総合司会：野末紀之准教授（大阪市立大学文学研究科）
 この研究会の企画・運営には大学院生があたった。

また、昨年度に引き続き、IS集中科目において英語で発表を行う大学院生のために、6月から**トレーニング・プログラム**を実施した。パワーポイントを使った英語プレゼンテーションについては語学研修のILCから講師を派遣していただき、6回の実習を行った。さらに、発表原稿の英語につき、本研究科英語教員が添削を行い、リハーサルを行った。大学院生の英語による発表は、毎年、その質が向上しており、トレーニング・プログラムの効果も一定の評価を得ているが、今年度は、発表内容そのものの質の充実も話題となった。今後は、発表する大学院生の指導教員と英語教員とがどう連携をとりながらトレーニング・プログラムの指導にあたるかが課題として指摘された。

IS集中科目とトレーニング・プログラム以外の取組は次のとおりである。

本学文学研究科大学院生および都市文化研究センター研究員を対象とする「**国際学会等発表・参加プログラム研究成果を持って外国に飛び出そう!**」を実施、2008年度は、研究発表をともなう学会参加に対し、旅費と宿泊費を支給し、英米文学、心理学、地理学、東洋史学、表現文化学の大学院生を、英国、ドイツ、チュニジア、タイ、韓国、中国に、のべ12名派遣した。インターナショナルスクール集中科目の午後に発表した大学院生がその後国際学会で学術発表を行うという流れが確立され、2009年度も年度末を中心に派遣を行う予定である。

このほか、G-COEと共催して、本学文学研究科大学院生およびUCRC研究員が、国内外の学術雑誌・書籍等への投稿、各事業機関の報告書等への寄稿、国際会議等での発表用原稿の作成に必要な外国語翻訳・校閲を1人合計75,000円を上限として補助する制度も開始した。

また2009年3月4～5日に崎村耕二京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科教授を招き、G-COE・インターナショナルスクール共催「英語論文ライティングセミナー」を実施した。また、英語による授業を日常化させる試みとして、2009年1月5日から7日にはTim Oakesコロラド大学ボルダー校地理学部准教授を招き、インターナショナルスクール実践演習として集中講義「中国の観光・モダニティ・統治性 Tourism, modernity, and governmentality in China」(通訳山崎孝史)を開催した。

なお、2009年10月1日から、IS事務室をUCRC事務室とともに1階L119から2階L201(旧サブセンター)に移転した。

重点研究の活動

井上徹(文学研究科教授、常任研究員)

大阪市立大学大学院文学研究科重点研究プログラム「アジア海域世界における都市の文化力に関する学際的研究」は2008年6月に採択された(研究支援期間は2008年度～2012年度)。

研究を推進するに当たっては、定例の重点研究運営会議(毎月1回程度)を開催し、研究会やシンポジウムの企画、経費執行、研究担当者の個別の研究課題と全体計画との関係を検討し、共同研究が円滑に運ぶように運営した。

(1) 研究会・シンポジウムの開催

・比較都市文化史研究会「杉森哲也著『近世京都の都市と社会』(東京大学出版会、2008.8刊行)を読む」

2008年11月23日、於：大阪市立大学文学部

書評：石岡知久・西本菜穂子(以上、大阪市立大学大学院文学研究科・大学院学生)

コメント 藤井正太(大阪市立大学大学院文学研究科・大学院学生)

・比較都市文化史研究会「中国都市の諸相」

主催：UCRC(重点研究)・中国近世近代史研究会・科研費特定領域研究、2008年12月20日、於：大阪市立大学文学部

報告 堀地明(北九州市立大学外国語学部教授)「清代搶糧搶米と刑罰」、辻高広(大阪市立大学大学院文学研究科・大学院学生)「江西省における都市と橋梁」

<比較史的視点よりのコメント>穴澤彰子(大阪市立大学大学院文学研究科・OD)「唐宋時代の都市空間に関する研究の紹介」

・シンポジウム「戦国期畿内研究の再構成と『細川両家記』」

主催：細川両家記研究会・UCRCドクター研究員プロジェクト、2009年1月24日、於：大阪市立大学学術情報総合センター

報告 古野貢(UCRCドクター研究員、武庫川女子大学)「細川氏研究と『細川両家記』」、天野忠幸(日本学術振興会特別研究員)「三好氏研究と『細川両家記』」、小谷利明(八尾市立歴史民俗資料館)「畠山氏研究からみた戦国期畿内政治史像の再検討」、西島太郎(松江市役所観光振興部歴史資料館整備室)「六角氏研究からみた戦国期畿内政治史像の再検討」、藤本誉博(大阪市立大学大学院文学研究科・大学院学生)「『細川両家記』の諸写本の比較」、藤本史子(大手前大学)「近年の発掘成果と『細川両家記』」

パネルディスカッション

・比較都市文化史研究会『中国都市の空間と特性』

主催：UCRC（重点研究）・科研費特定領域研究・中国近世近代史研究会，2009年1月24日，於：大阪市立大学文学部

報告 巫仁恕（台湾中央研究院研究員）「從城市看中國的現代性－兼論近史所城市史資料庫的建置與利用」（通訳 王標），小島泰雄（神戸市外国語大学外国語研究所教授）「中国四川における市場町の変遷」，岡元司（広島大学大学院文学研究科准教授）「東アジア海域交流史のなかの寧波－地域・環境・都市－」

・重点研究国際シンポジウム「往来する都市文化－《断片》から探るアジアのネットワーク」

2009年3月17日，於：大阪市立大学学術情報総合センター第1セッション「16世紀東アジア海域世界往来－港町を結ぶモノと文化」

報告 佐伯弘次（九州大学教授）「16世紀における東アジアの変容と文物の交流－貿易港博多を中心として－」，仁木宏（大阪市立大学准教授）「港町大坂の誕生－都市「自治」とその変容－」，菊池誠一（昭和女子大学教授）「港町ホイアンからみるアジア交易世界」

第2セッション「台湾都市文化におけるモダニティの行方」

報告 星名宏修（琉球大学准教授）「ラジオと蕃地－中山侑のラジオドラマを読む」，呉孟晋（東京大学大学院・大学院学生）「東西冷戦と台湾の水墨画－劉国松と徐復観の現代絵画論争（1961年）について」，廖炳惠（台湾清華大学教授）「映画とトラウマの都市－台北都市文学を例にして」

第3セッション「アジアにおける都市文化としての広告」

報告：竹内幸絵（神戸大学大学院・大学院学生）「関西モダニズムと広告－1920-30年代の人と表現」，呉咏梅（北京外国語大学副教授）「衛生・美のモダニティを売りましょう：近代中国における日本の医薬・化粧品新聞広告とカレンダーポスター」，黄升民（中国伝媒大学広告学院院長教授）「アジアにおける中国の広告史」

・2008年度重点研究・研究成果報告会

2009年3月19日，於：大阪市立大学法学部

報告 (1) 国際シンポジウム (3月17日) を受けて

(2) 各研究担当者による研究成果報告

・ミニシンポジウム「外交文書から見た東アジア海域世界－宋代を中心に－」

2009年5月23日，於：大阪市立大学法学部

基調報告：山崎覚士（仏教大学文学部准教授）

コメント：広瀬憲雄（日本学術振興会特別研究員）「唐代書儀研究の立場から」，豊島悠果（東京大学次世代人文学開発センター・研究員）「宋・高麗関係史の立場から」，毛利英介（日本学術振興会特別研究員）「遼・宋関係史の立場から」，井黒忍（大谷大学研究員）

「宋・金関係史の立場から」

・比較都市文化史研究会「書評 河原温氏著『都市の創造力』（岩波書店，ヨーロッパの中世2，2009.1刊行）」

2009年6月20日，於：大阪市立大学経済学部

評者 西洋史；中谷惣（日本学術振興会特別研究員），日本史；仁木宏（大阪市立大学大学院文学研究科・教員），東洋史；山崎覚士（佛教大学文学部・教員），山口智哉（大阪市立大学大学院文学研究科・大学院学生），法制史；高谷知佳（京都大学大学院法学研究科・教員）

コーディネーター：大黒俊二（大阪市立大学大学院文学研究科・教員）

・近世大坂研究会

共催：UCRC（重点研究）・G-COE都市論ユニット，2009年6月20日，於：大阪市立大学文学部

報告：後藤雅知氏（千葉大学）「近世後期岩槻藩総領における薪炭生産」

・シンポジウム「前近代中国の中央・地方・海外を結ぶ官僚システム」

主催：科研費特定領域研究・比較都市文化史研究会，2009年7月4日，於：大阪市立大学1号館

第1部：7月4日「外交文書から見た東アジア海域世界」

趣旨説明 平田茂樹（大阪市立大学）

報告 広瀬憲雄（東京大学）「宋代東アジアの国際関係概観－唐代・日本の外交文書研究の成果から－」，山崎覚士（仏教大学）「外交文書より見た東アジア海域世界－宋代明州を基軸として－」，豊島悠果（東京大学）「麗宋間の外交文書にみる高麗の位置付けと外交姿勢－国書・陪臣表を中心に－」，毛利英介（京都大学）「遼・宋間の外交文書について－特に白簡子に注目して－」，井黒忍（京都大学）「外交方式から見た12-13世紀東アジアの国際関係－金宋関係を中心に」総合討論

第2部：7月5日「東アジア海域における国際交流と政治権力の対応」

趣旨説明 井上 徹（大阪市立大学）

報告 山崎岳（京都大学）「海はだれのものか－明代の「海権」論を題材に」，荷見守義（弘前大学）「宗藩の海－明人華重慶の朝鮮漂着事件によせて」，范金民（南京大学）「文書遺珍－清代前期中日貿易若干史実」，渡辺美季（東京大学）「国境を越える人々～近世琉薩交流の一側面～」，銭杭（上海師範大学）「民国初年浙江蕭山湘湖改造の外国モデル」総合討論

・国際円座「近世身分社会の比較史」

主催：UCRC（重点研究），G-COE都市論ユニット，近世大坂研究会，ぐるーぷ・とらっど3，2009年7月18日・19日，於：大阪市立大学高原記念館

7月18日 事例報告 塚田孝（大阪市立大学）「近世大坂の身分的周縁－問題提起をかねて」，井上徹（大阪市

立大学)「依るべきは無頼か郷紳か? - 明末の都市広州の米騒動と救済-」, マーレン・エーラス (プリンストン大学・大学院学生)「大野藩の古四郎と救済」, 三田智子 (大阪市立大学・大学院学生)「畿内のかわた村 - 竹皮流通をめぐって-」, 竹ノ内雅人 (飯田市歴史研究所)「天保期江戸における修験・神職の移住政策とその影響」, 及川将基 (立教大学・大学院学生)「鯨組組織と鯨場をめぐる諸関係」, 中谷惣 (大阪市立大学G-COE特別研究員)「中世後期イタリアの都市文書にみる貧者《pauperes》」

7月19日 総合討論

問題提起 岸本美緒 (お茶の水女子大学)「明清期の身分と日本近世の身分」, デビッド・ハウエル (プリンストン大学)「近世朝鮮の身分社会 - 日本との比較の試み-」, ダニエル・ボッツマン (ノースカロライナ大学)「カーストと身分 - 比較社会史の可能性を探って-」

総括コメント 吉田伸之 (東京大学)

共同討論 問題提起者 (岸本美緒, デビッド・ハウエル, ダニエル・ボッツマン, 吉田伸之), 井上徹, 塚田孝, 森下徹 (山口大学)《近世史の立場から》, 大山喬平《中世史の立場から》, 鈴木良《近代史の立場から》

・比較都市文化史研究会

2009年7月11日, 大阪市立大学法学部

赤木崇敏 (神戸市外国語大学・客員研究員)「唐代官文書体系の変遷」, 小林隆道 (早稲田大学大学院博士課程)「宋代「文書」の様式と機能 - 蘇州玄妙観「朝旨蠲免天慶観道正司科敷度牒省節符使帖」を事例に一」

・シンポジウム「金沢職人の日記から読む近代地方都市 - 生活史研究と日記分析」

2009年9月7日, 大阪市立大学高原記念館

午前 日記分析の方法 - 生活世界と歴史解読

近藤敏夫 (佛教大学准教授)「日記に記述される生活史の特徴と生活世界の分析方法」, 青木秀男 (社会理論・動態研究所所長)「日記分析の方法と歴史解読」

コメンテータ: 谷富夫 (大阪市立大学大学院教授), 司会: 大谷栄一 (佛教大学准教授)

午後 近代金沢の職人世界 - 生活倫理の構造

青木秀男 (社会理論・動態研究所所長)「職人労働のエートスの構造」, 水越紀子 (社会理論・動態研究所研究員)「職人の家父長制のかたち」, 近藤敏夫 (佛教大学准教授)「職人の生活世界にみる金沢の人間関係」, 坪田典子 (文教大学非常勤講師)「近代を生きた金沢職人の帝国意識」

コメンテータ: 西村雄郎 (広島大学大学院准教授), 能川泰治 (金沢大学准教授), 司会: 土屋礼子 (大阪市立大学大学院教授)

・比較都市文化史研究会

2009年9月26日, 大阪市立大学1号館

藤本猛 (京都大学人文科学研究所・非常勤研究員)「北宋末, 御筆とその周辺について」, Hilde de Weerdt (オックスフォード大学・准教授) The Representation of Competing Polities and Ethnic Others in Song Political Discourse

・比較都市文化史研究会

2009年11月14日, 大阪市立大学法学部

松本保宣 (立命館大学文学部・教授)「唐代の上奏過程と『中書門下体制』」, 安田真穂 (関西外国語大学国際言語学部・准教授)「中国文言小説にあらわれる嫉妬 - その怪異性と愛情表現 -」

(2) 個別研究プロジェクト

個別研究プロジェクトを立ち上げ, 各専門の関連課題の研究を進めた。

「近世大坂・近代大阪の法と社会についての研究, および海外連携研究者とのネットワーク作り」(塚田孝), 「イギリス東インド会社マカッサル商館文書翻刻」(早瀬晋三), 「20世紀中国演劇史における戯単・特刊の基礎的研究」(松浦恆雄), 「『上方文化講座2008義経千本桜』書籍化のための準備作業」(久堀裕朗), 「中国都市の水路ネットワークと文化拠点に関する比較史的研究」(井上徹), 「昭和初期大阪の都市文化としての広告メディア研究: 『ホームライフ』を中心に」(土屋礼子)。

(3) 海外ネットワークの構築

海外ネットワークを構築する一環として, 次の事業を推進した。ノースカロライナ大学歴史学部, プリンストン大学東洋学部と共同で「法と社会」に関するシンポジウムを現地で開催 (塚田孝)。復旦大学 (中国)・ハーバード大学共催の東アジア都市史シンポジウム (上海・杭州)に参加 (塚田孝, 井上徹)。また都市研究の蓄積をもつ中央研究院近代史研究所 (台湾)の研究員巫仁恕氏を招聘し, 相互の協力関係を強めた (井上徹)。

以上の研究を推進するに際しては, UCRCのWEB上に「重点研究」のサイト <http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/UCRC/ja/priority-research/index.html> を設けて情報を開示した。また, 2009年4月11日, 重点研究外部評価委員会を開催し, 外部審査委員の岸本美緒氏 (お茶の水女子大学)より, 本研究プロジェクトに関する外部評価を受けた。

都市問題研究(新規採択分)の活動

大場茂明(文学研究科教授, 常任研究員)

○プロジェクトの名称

「住みごたえのある町」をつくるー大阪・ハンブルクにおける市民文化に基づくエリアマネジメントー

○研究の目的

本研究は、行政、地元企業・団体、住民など、地区に関わる様々なアクターが関与する文化活動が、新たな都市居住の魅力を創出し、地区の再生・発展に寄与しうる可能性について、内外の先行研究を踏まえながら理論的検討を加えるとともに、大阪、ハンブルク両市を対象に、コミュニティレベルで実施されている文化施策を比較分析することを通じて、市民文化を基礎に置いた具体的な「まちづくりモデル」を提案することを目的とする。

このプロジェクトを通じて、専門分野を異にしながらも都市文化や市区再生に関心を持つ日独双方の研究者が集い、これまで文学研究科が共同研究や大学間交流事業を通じて培ってきた蓄積を活かすとともに、大阪市立住まい情報センター、ハンブルク市都市更新・都市開発公社(steg)と連携しつつ事業を推進することにより、地域文化の発展に寄与し、現代都市が抱える環境・社会問題等の解決にも資することを目指す。

○研究期間

2009年度～2011年度(3ヶ年)

○研究メンバー

代表: 大場茂明

共同研究者: 北村昌史(西洋史), 高梨友宏(哲学), 久堀裕朗(国文学), 海老根剛(表現文化学)(以上, 文学研究科教員), ガブリエレ・フォークト(ハンブルク大学), デイルク・シューベルト(ハンブルク・ハーフェンシティ大学), ハンス・レースナー, クルト・ラインケン(以上, ハンブルク市都市更新・都市開発公社)

○実績と今年度の予定

- ・2009年7月24日 大阪市立住まい情報センターとの研究打ち合わせ
- ・2009年8月1日 九条地区(大阪市西区)現地視察と地元関係者との意見交換(第1回)
- ・2009年8月28～29日 ドイツ側研究者との研究打ち合わせ(ハンブルク大学ほか)
- ・2009年9月28日 九条地区現地視察と地元関係者との意見交換(第2回)
- ・2009年11月14日 九条地区映像の撮影
- ・2009年11月22～30日 ハンブルク訪問

本研究プロジェクトに参加する日本側研究者4名がハンブルクを訪問し、映像等を用いた九条地区を中心とする大阪での取組みを紹介するとともに、市内の再生事業地区(St.Pauli, Hafencityほか)の現地視察と映像撮影、ドイツ側研究者との意見交換を行った。

- ・2010年3月7日 公開フォーラム「映像でみるドイツ・ハンブルクの暮らしー大阪下町との意外な共通点とは?ー」(於: 大阪市立住まい情報センター)

九条地区ならびにハンブルク市内の再生事業地区にて撮影した映像を紹介するとともに、本年度の研究成果を報告する。

上方文化講座2009〈仮名手本忠臣蔵〉

久堀裕朗(文学研究科准教授, 常任研究員)

2009年度の上方向文化講座は、昨年度の『義経千本桜』に引き続き、三大名作の『仮名手本忠臣蔵』に取り組んだ。

今年も学外非常勤講師として、竹本津駒大夫、鶴澤清介、桐竹勘十郎の三師を迎え、文学研究科教員とともに、8月26日から28日までの3日間(連日9:30～16:00)、大阪市立大学学術情報総合センター大会議室を会場にして、人形浄瑠璃文楽や『仮名手本忠臣蔵』の魅力を多角的に分析する授業を展開した。

応募者多数の中から抽選で選ばれた一般市民約100名と、学生約50名が受講。授業内容は以下の通り。

8月26日(水)

赤穂義士劇の系譜(久堀裕朗・大阪市立大学), 『仮名手本忠臣蔵』解説(久堀裕朗), 切腹の文学史(小林直樹・大阪市立大学), 近世大坂の芝居と身分社会(塚田孝・大阪市立大学)

8月27日(木)

『仮名手本忠臣蔵』〔六段目〕講読(久堀裕朗), 浄瑠璃の言語(丹羽哲也・大阪市立大学), 『仮名手本忠臣蔵』一太夫・三味線の芸(竹本津駒大夫・鶴澤清介), 『仮名手本忠臣蔵』一太夫・三味線・人形の芸(竹本津駒大夫・鶴澤清介・桐竹勘十郎)

8月28日(金)

フランス人が真似た日本の文楽(小田中章浩・大阪市立大学), 伍子胥から見た中国の復讐物語(松浦恆雄・大阪市立大学), 桐竹勘十郎師に聞くー実演をまじえて(桐竹勘十郎), 文楽の至芸ー一太夫・三味線・人形, 三業一体の舞台(竹本津駒大夫・鶴澤清介・桐竹勘十郎)

アーカイブス事業 (萬年社コレクションの整理調査)

土屋礼子 (文学研究科教授, 常任研究員)

萬年社コレクションは、1999年、大阪および日本を代表する広告代理店である萬年社が倒産した折に、管財人により売り立てられた資料類が大阪から流出することを憂いた有志が購入し、大阪市立近代美術館建設準備室に寄贈したものである。

このうち未整理だった、ビデオ・テープ類および紙・印刷資料類の調査研究を進めている。これまで戦前・戦中期の広告史研究を進めてきた大阪メディア文化史研究会が共同研究の母体となり、文学研究科長裁量経費の他、吉田秀雄記念財団より得た研究助成金などによって以下の作業をおこなった。

(1) **ビデオ・テープ類**：全体203の箱のうち、9割の目録を作成。約9,000本のテープ類があることを確認。うち、約4,000本が画像テープ、約3,700本が音テープ。画像テープは主にテレビCM。8ミリ、16ミリ、35ミリ、1インチ、βカム、VHS、μマチックなど多様なテープが含まれる。音テープには、ラジオCMだけでなく、音源のテープが多数含まれる。1970年代から1990年代制作のものが中心。この他に、レコードなども含まれている。

目録は2010年3月末までに完成し、ホームページで公開する予定。(HP準備中)

(2) **ラジオCMのデジタル化とテキスト入力**：上記のVTの箱のうち、3箱約350本を業者に委託してデジタル化。トラック数約1460、このうち台詞や歌詞のあるCMについて、トランスクリプトしてテキストを入力。現在約150点を入力。

(3) **ビデオ・テープ類の添付資料**：ビデオ・テープ類に添付されていた紙やネガなど雑多な資料をデジカメで写真撮影。約400枚の画像をファイリング作業中。

(4) **紙・印刷資料**：段ボール箱が91箱、および大型冊子約90冊を確認。このうち、企業ファイル24箱を目録作成終了。企業ファイルは約240冊、約10,000点の資料。写真撮影約1,000枚。

現在は、大型冊子を整理中。新聞の切り抜き類など。この他に、文書・手紙類、ポスターなどあり。これらの紙・印刷資料は2010年度末までに整理する予定。

文学研究科叢書編集委員会

中川真 (文学研究科教授, UCRC所長)

研究科叢書は現在、第6巻「文化遺産と都市文化政策」の編集作業を行っている。これは、2006年9月に行われたCOE (旧21世紀COE) ウィークにおけるシンポジウムの報告が中心であり、執筆者は栄原永遠男、バナソビット・メーヴィチャイ、チャールズ・B・メール、スプラプト・スジヨノ、陳映芳、布野修司、吉田伸之、佐々木雅幸、森洋久の9名である。2009年度に刊行の予定である。

『都市文化研究』編集委員会

久堀裕朗 (文学研究科准教授, 常任研究員)

① 2009年度委員

海老根剛 (大阪市立大学大学院文学研究科准教授, 表現文化学, 12号編集主任), 久堀裕朗 (大阪市立大学大学院文学研究科准教授, 国語国文学, 編集委員長), 佐伯大輔 (大阪市立大学大学院文学研究科准教授, 心理学), 祖田亮次 (大阪市立大学大学院文学研究科准教授, 地理学), 仲原孝 (大阪市立大学大学院文学研究科教授, 哲学, 12号編集主任), 仁木宏 (大阪市立大学大学院文学研究科教授, 日本史学), 平田茂樹 (大阪市立大学大学院文学研究科准教授, 東洋史学), イアン・リチャーズ (大阪市立大学大学院文学研究科准教授, 英語英米文学)

② 昨年度からの変更

- ・編集委員長 平田茂樹 (2008年度) → 久堀裕朗 (2009年度)
- ・編集主任 海老根剛・久堀裕朗 (2008年度) → 仲原孝・海老根剛 (2009年度)
- ・執筆要項 通常の投稿資格者以外であっても、都市文化研究センターの研究成果として発表することが適当である場合、執筆を認めることがあることを、執筆要項に明記した。

科学研究費申請を支援する事業

仁木宏（文学研究科教授，UCRC副所長）

文学研究科教員や，UCRCドクター研究員などの若手研究者の研究条件向上の一施策として，文部科学省・日本学術振興会の科学研究費補助金申請を支援する事業を今年度も行った。

科学研究費補助金申請アドバイスの会（教員向け）

2009年10月2日，大阪市立大学文学部

近年，科学研究費の採否にかかわる審査員をつとめた経験がある，文学研究科関係教員2名から，申請書作成のポイント，審査基準の内容などについて，アドバイスをを行った。

文学研究科若手研究者のための科研費申請対策講座2009

2009年10月7日，10月13日

文学研究科関係教員より，申請書作成の注意点，審査の実態などについてアドバイスがなされた。今年度は2回開催した。

釜山大学校韓国民族文化研究所との 学術交流協定

仁木宏（文学研究科教授，UCRC副所長）

釜山大学校韓国民族文化研究所は，歴史・文学・言語・政治などの諸分野の研究者によって構成され，韓国文化，地域学，日韓関係などを研究している。

21世紀COEにおいてUCRCが果たした成果を確認し，研究の現状を視察するため，2009年7月1日，同研究所の金東哲所長以下の調査団が来学された。その後，相互に学術交流を進めるために交流協定を締結することになり，金所長以下が再度来学され，10月13日，「大阪市立大学都市文化研究センターと釜山大学校韓国民族文化研究所との間の学術交流に関する協定書」が結ばれた。

今後は，(1)教員・大学院生および研究者の交流，(2)学術資料及び研究情報の交換，(3)共同研究及び共同学会の企画・運営など，幅広い交流を進めてゆく予定である。

ドクター研究員による研究プロジェクト

仁木宏（文学研究科教授，UCRC副所長）

すべてのドクター研究員に研究費を支給するのではなく，希望する研究員から申請をうけつけ，すぐれたプロジェクトに資金援助することで若手研究者の研究支援を行っている。

2008年度は，下表の12件を採択した。文学研究科長裁量経費や重点研究より支援を得，各プロジェクトに100,000円を上限に支給した。この金額で足りない研究資金は自己負担してもらうことになる。

それぞれのプロジェクトは，ドクター研究員が研究代表者となり，他のドクター研究員や院生・学生を研究協力者とすることができる。予算申請の都合上，担当教員を配置しているが，プロジェクトの遂行はあくまでドクター研究員によるものである。

各プロジェクトの詳しい内容，成果については，別掲の報告（成果報告）参照。

2008年度ドクター研究員プロジェクト一覧

No.	テーマ	ドクター研究員	指導教員
1	「日本語日本文学研究と情報化」研究会	足立 匡敏★ 高重 久美	村田 正博
2	文化的秩序の再建と都市景観の形成 －中国知識人社会と地域名勝の相互作用－	王 標★	山口 久和
3	東アジアと日本古代都城をつなぐ道を探る ～外国使節の迎撃道～	竹本 晃★	柴原 永遠男
4	ルクセンブルク語コイネー（共通語）研究会	田原 憲和★	神竹 道士
5	都市部の小学校における福祉教育実践過程の検証 －教師に対するインタビュー調査から－	広瀬 美千代★	湯浅 恭正
6	戦国期畿内政治史および都市史を再検証するための 軍記資料「細川両家記」研究	吉野 真★ 村井 良介	仁木 宏
7	現代都市とファッション文化の創造的コンタクト/ コネクト	松田 いりあ★ 梁 仁貴 佐野 明子 川口 夏希	石田 佐恵子
8	大阪市阿倍野区地区における新しい都市空間創出に関する 連続的オープンフォーラム計画	川口 夏希★	大場 茂明
9	マイノリティとされる人々の「語り」から見る「場所」 の記憶－和泉市幸地区に居住する在日コリアン高齢者の 体験と語りから－	柴田 剛★	水内 俊雄
10	近世都市史研究の方法を学ぶラウンドテーブル	山崎 竜洋★	塚田 孝
11	東アジアにおける辞理「讀書録」の読み方	白井 順★	山口 久和
12	戦間期における地域社会とマス・メディアの軍縮言説の 構造 －「真新聞」の内容分析を事例に－	中嶋 晋平★	土屋 礼子

注）★マークが研究代表者

2009年度は，下表の10件を採択し，研究活動を開始した。予算，体制などは2008年度までと同じである。

各プロジェクトの詳しい内容，成果については，別掲の報告（中間報告）参照。

2009年度ドクター研究員プロジェクト一覧

No.	テーマ	ドクター研究員	指導教員
1	ルクセンブルク共通語(コイナー)研究	田原 憲和★ 磯部 美穂	神竹 道士
2	文化的秩序の再建と都市景観の形成 —中国知識人社会と地域名勝の相互作用—	王 標★	山口 久和
3	都市的環境がもたらすアイデンティティの複雑化と異文化受容	向井有里子★ 田端 拓哉 宮崎 弦太	池上 知子
4	戦国期畿内都市史のための軍記史料「細川両家記」の研究 —歴史学・考古学・国文学による学際的アプローチの試み—	古野 貢★ 村井 良介 天野 忠幸	仁木 宏
5	ルーマニア・モルドヴァ地方の教会堂外壁画。 通称「コンスタンティノーブル包囲」と「コンスタンティノーブル陥落」事件との関連について	早川 美晶★	井上 浩一
6	GHQ占領期大阪における在日朝鮮人メディアの歴史社会学的研究	小林 聡明★	土屋 礼子
7	ダニエル・ボツマン著「Punishment and Power in the Making of Modern Japan」(Princeton UP)を精読し書評する日本近世史・近代史合同研究会	西尾 泰広★ 山崎 竜洋 山下 聡一	塚田 孝
8	歌謡の研究	根来 麻子★ 高重 久美	村田 正博
9	戦間期における地方紙の軍に関する報道と世論形成 —「京都日出新聞」の軍縮報道を事例に—	中嶋 晋平★	土屋 礼子
10	近代短歌の発生と展開についての研究 —佐佐木信綱における短歌革新の解明をとおして—	足立 匡敏★	村田 正博

注) ★マークが研究代表者
テーマはいずれも採用当初のもの

2008年度ドクター研究員プロジェクト成果報告

1. 足立匡敏「『日本語・日本文学研究と情報化』研究会」

研究協力者：高重久美（UCRCドクター研究員）、根来麻子・大坪亮介・藪崎淳子・能登敦子・田中寛子・岡崎智美・周宜静・其木格・堀内誠太郎（以上、大阪市立大学大学院文学研究科・大学院学生）、浅野聡・岡嶋奏歩・隅野裕介・福地香織・堀友美・米田多恵子（以上、大阪市立大学文学部・学生）

本プロジェクトでは、日本語・日本文学研究を専門にする院生・学部生が、「情報活用能力」と「情報発信能力」の向上をめざして、以下の研究会を実施した。

(1) 研究会準備会（2008年6月4日，於：大阪市立大学）
テーマ：日本語・日本文学研究の情報化における課題整理
研究発表者：参加者全員

プロジェクトの採用決定通知を受け、今後の研究会のテーマと公開講演会の講師招聘について議論した。

(2) 第1回研究会（2008年8月5日，於：大阪市立大学）
テーマ：様々なデータベースを有効活用する
研究発表者：能登敦子

発表者の能登氏が、日本語・日本文学研究に関連するデータベースの情報を、①書誌・目録データベース、②本文データベース、③画像データベースの3つ

のジャンルに分類・整理し、紹介・考察を行った。

(3) 第2回研究会（2008年8月19日，於：大阪市立大学）
テーマ：日本語・日本文学研究における情報化の現状と課題
研究発表者：足立匡敏

公開講演会の事前勉強会もかねて研究会を実施した。発表の要旨は、①コンピュータを利用した研究が進むと、情報の共有という視点が大切になること、②すべての人の要望を満たすデータベースはあり得ず、参加・追加型のデータベースという発想が有効であること、③コンピュータという道具の特性を深く理解し、コンピュータを主体的に研究に使いこなす能力が重要であること、であった。

(4) 第3回研究会（公開講演会）（2008年8月22日，於：大阪市立大学）

演題：文系の研究者になぜ情報処理が必要か
講師：中村康夫氏（国文学研究資料館教授）

中村氏が開発に携わった様々なデータベースを例に、データベースは誰のために、何に配慮して作られているかについてお話し下さった。データベースといえども、客観的なものではなく、作成者の解釈が潜んでいる問題について指摘があった。

また、コンピュータの強みを踏まえて、研究の場における具体的な活用方法を示してくださった。

(5) 第4回研究会（2009年3月16日，於：大阪市立大学）
テーマ：情報発信の問題点を探る—著作権問題を中心に—
研究発表者：足立匡敏

発表者が携わる与謝野晶子自筆原稿のデジタル画像化およびインターネット上での画像データベース公開を具体例にしながら、情報発信の上での著作権問題について発表した。

(6) 第5回研究会（2009年3月16日，於：大阪市立大学）
テーマ：研究発表におけるパワーポイントの利用
研究発表者：足立匡敏

パワーポイントが効果を上げる研究発表の一つに、推敲原稿の画像を分析しながら、作品の生成過程を考察することが挙げられる。そうした画像を活用した効果的な研究発表の在り方について議論した。また、パワーポイントによる発表の問題点についても議論を行った。

以上、5回の研究会をとおして浮かび上がった課題として、①デジタル化の過程で原本の持つ情報が失われる可能性がある（特殊な字体、本文注記、他本との異同など）、②すべての人の要望を満たすデータベースはあり得ず、参加・追加型のデータベースという発想が有効である、③コンピュータを主体的に使いこなす能力が重要である、などが挙げられる。こうした点を踏まえた上で、研究成果を「文学館における情報化の現状と課題」と題してまとめる予定である。

まな特徴に着目しながら、質問紙調査により多角的に検討を行っている。

2009年4月から6月にかけて大阪市立大学、四條畷学園大学、関西大学の心理学関連の授業時間の一部を利用して質問紙調査を実施した。回答者の負担を軽減するため、調査冊子を前半（Part 1）と後半（Part 2）に分割し一週間の間隔をおいて2回に分けて実施した（ただし、関西大学ではPart 2のみを実施した）。Part 1では、文化的自己観と自尊心、愛着スタイルと愛着対象の有無、死生観と日本的慣習の実践度と異文化への態度などを測定し、Part 2はアイデンティティの複雑性と対人関係の志向性などを測定した。有効回答者数はPart 1が550名（男性280名、女性270名）、平均年齢18.6歳（標準偏差1.03歳）、Part 2は675名（男性328名、女性345名、不明2名）、平均年齢18.9歳（標準偏差1.22歳）であった。調査の結果については現在、プロジェクトの参加者がそれぞれ分析を行っている。

この調査結果の一部は日本社会心理学会第50回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第56回大会合同大会（2009年10月10日（土）、11日（日）、12日（休）、於：大阪大学吹田キャンパス）で発表した。発表者、タイトル、発表月日・発表形態は以下のとおりである。

宮崎弦太・向井有理子・田端拓哉・池上知子「友人関係の単一・多重送信性と拒絶のサインへの感受性－愛着傾向による調整効果に注目して－」（10月10日、口頭発表）

田端拓哉・向井有理子・宮崎弦太・池上知子「アイデンティティの多様性がレジリエンスにもたらす影響」（10月10日、ポスター発表）

向井有理子・宮崎弦太・田端拓哉・池上知子「存在脅威管理理論における不安緩衝機能と異文化受容の関係－文化的自己観による違い－」（10月12日、ポスター発表）

また、以下の論文が『都市文化研究』12号に掲載される。

宮崎弦太・田端拓哉・池上知子『友人関係の単一・多重送信性と都市的環境への適応－都市部大学生を対象として－』

今後は、都市的環境がもたらすアイデンティティの複雑化が異文化受容の促進要因となりうるか、それはいかなる心理機制によるのかに関してさらに分析、検討を行う予定である。また、その結果については来年度の日本社会心理学会第51回大会（2010年9月17日（金）、18日（土）、於：広島大学）にて発表を行う予定である。

4. 古野貢「戦国期畿内都市史のための軍記史料

『細川両家記』の研究－歴史学・考古学・国文学による学際的アプローチの試み－

研究協力者：村井良介（UCRCドクター研究員）、天野忠幸（UCRCドクター研究員、日本学術振興会特別研究員）、藤本史子（大手前大学）、藤本誉博、稲垣翔（以上、大阪市立大学大学院文学研究科・大学院学生）、石本倫子（関西大学）

1, プロジェクトの目的, 予想される成果

①目的：昨年度プロジェクトの成果をふまえ、戦国期畿内都市史研究進展のために、『細川両家記』のテキストとしての評価（著者の立場・地位、認識、情報への接し方・処理の方法など）や、叙述の相対化について、さらに精密な分析を行う必要がある。（1）昨年度分析した写本に加え、さらに未検討の諸写本を校合し、『細川両家記』の最も古態に近い記述を探るとともに、他の軍記史料との系譜関係などから、同史料の成立を検討する。（2）一次史料・考古学的成果との比較による分析により、『細川両家記』の位置づけ、著者生嶋宗竹の視点の明確化、都市を拠点とした諸権力の権力構造、畿内都市史の再検討を行う。

②作業：（1）『細川両家記』の諸写本間の表現方法や用語の差異の確認のため、月3回程度の研究会を開催し、昨年度未検討の諸写本（彰考館本、加賀市立図書館蔵聖藩文庫本、尊経閣文庫本、神宮文庫本）との校合作業、史料批判。（2）諸写本の系譜関係、成立年代の近い他の軍記史料との関係について、国文学の研究手法・成果を学ぶため、同分野における戦国期畿内軍記史料の研究者を講師として招き、2回程度の勉強会を行う予定。

③予想される成果：（1）昨年度の成果と合わせ、より精密な『細川両家記』諸本の類譜を明らかにできる情報を得ることが可能となる。（2）歴史的なテキスト解釈・理解にとどまらず、国文学的な解釈・理解の方法を得ることで、『細川両家記』の書誌学的検討を進展させることが可能となる。

④勉強会（予定）：（1）テーマ：『細川両家記』の書誌学的検討。（2）講師：鶴崎裕雄氏、瀬戸祐規氏。

（3）会場：大阪市立大学文化交流センター

2, 調査

昨年度未検討の諸写本の調査：彰考館本、加賀市立図書館蔵聖藩文庫本、尊経閣文庫本、神宮文庫本。各機関と連絡し、写本コピーの作成・送付を依頼（現在手続き中）。今後、現在作業中の諸写本との校合作業を行う。

3, 成果報告

調査・検討作業を終えたのち、テキスト情報、研究の過程で得られた新事実、研究論文などを含んだ報告書の刊行を目指す。

ター（参加者6名）

報告1：田原 憲和（プロジェクト代表者，大阪市立大学）「ルクセンブルク語の母音に関する考察」

報告2：小川 敦（招待講師，一橋大学）「ホフマンの三言語主義に関する若干の考察」

報告3：木戸 紗織（研究協力者，大阪市立大学大学院文学研究科・大学院学生）「ルクセンブルク語聖書をめぐる状況」

ルクセンブルク語による識字化，ドイツ語との差別化という統一テーマに則り報告が行われた。ドイツ語という大言語の一部と見なされてきたルクセンブルク語が，それとは異なる単一の個別言語であるとする根拠として，19世紀にはその音韻の特徴が強調され，第二次世界大戦後にはルクセンブルク語の機能を高めることで社会的な地位を与え，そして近年では聖書翻訳が進んでいる。このような各時代の様々な動きとその意義について，参加者と議論が交わされた。

ルクセンブルク語コイネー研究会 講演会

2009年10月24日（土）於：大阪市立大学梅田サテライト（参加者7名）

講演：田村建一（招待講師，愛知教育大学）「ルクセンブルクにおける言語教育をめぐる議論とそこから見える国民アイデンティティ」

本講演会では，ルクセンブルクの言語教育とアイデンティティ問題の研究者である田村氏を迎え，約3時間にわたり報告と議論が行われた。ルクセンブルクにおける三言語教育の現状とその成果，そしてルクセンブルクの人口の約4割を占める外国人に生じている言語習得上の問題点について詳細に報告がなされた。ドイツ語研究者，フランス語研究者，英語研究者それぞれの立場からの質問も多く出され，活発かつ多面的な議論が行われた。とりわけ，ルクセンブルク語が社会の中でどのような位置づけにあるのかという点について有益な意見交換を行うことができた。

2. 王標「文化的秩序の再建と都市景観の形成—中国知識人社会と地域名勝の相互作用—」

今年度は宋肇と滄浪亭の再建を考察する。宋肇（1634-1713，河南商邱の人）は清代前期に政府要人の地位を以て文壇を主宰した人物であり，かつて順治帝の侍衛を務め，康熙三年（1664）に湖北黃州推官となり，二十七年（1688）に江西巡撫に進み，三十一年（1692）に江蘇巡撫に遷り，四十四年（1705）に吏部尚書に上った。宋肇は湖北・江西・江蘇の任官中に大勢の文人を網羅し，一つの文人集団を形成した。それ故に，本年度の研究は宋肇を中心にして，彼が蘇州で行った滄浪亭の再建，および地元知識人たちとの交遊を考察する。

滄浪亭が所在する庭園は五代時代のものであるが，滄浪亭自体は北宋の慶歴五年（1045）に詩人蘇舜欽に築造されたものである。蘇舜欽（1008-1048，河南開封の人），字は子美。政治革新グループに参加したため，権力者に排斥され，官を辞した後は蘇州の滄浪亭に隠居した。蘇舜欽は歐陽修，梅堯臣と親しく，彼らとともに新しい宋詩の創造の先頭にたち，梅堯臣と名声を等しくし，「蘇梅」と並称された。元明時代（1271-1644），滄浪亭は廃れて仏教寺院となった。宋肇は江蘇巡撫在任中にその遺跡を訪ね，近くの山上に再建し，康熙三十五年（1696）二月に完成した。

蘇舜欽の再発見と滄浪亭の再建は実は清初詩壇の「宗宋」（宋詩を宗とする）ブームに関わっている。清初の「宗宋」は明代の「宗唐」（李攀龍らの復古主義・擬古主義）に対する反動であると同時に，異民族のモンゴル（元）に滅ぼされた宋代の衣冠文物が明の遺民たちに故国への思いを募らせたからである。

研究方法として，まず，文献学的調査を踏まえ，『紹定吳郡志』・『統吳郡志』・『崇禎吳郡志』・『乾隆蘇州府志』・『蘇州古城地図』・梁章鉅『滄浪亭志』などの地方志を駆使し，滄浪亭の歴史や立地変遷（池畔→山上）などを考察し，さらに『蘇學士文集』・『蘇舜欽資料匯編』・『滄浪小志』などの文献資料を用い，蘇舜欽と宋肇の「滄浪亭」という隠居空間に対する認識の相違を分析する。次いで，宋肇の『西陂類稿』・『縣津山人詩集』・『漫堂年譜』や尤侗の『西堂全集』などの資料を用い，宋肇と蘇州の文人たちとの交遊関係を再現し細かく分析することを通し，景観の再建が如何にして清初の文化的政治的秩序の再建に役立ったのかを明らかにしたいと考える。

現段階では，関連の文献資料・先行研究の収集作業がほぼ完成し，現在，その文献資料を精読しながら，「宋肇と滄浪亭の再建」と題する論文を執筆中である。

3. 向井有理子「都市的環境がもたらすアイデンティティの複雑化と異文化受容」

研究協力者：田端拓哉（大阪市立大学大学院文学研究科・大学院学生，UCRCドクター研究員）・宮崎弦太（大阪市立大学大学院文学研究科・大学院学生，UCRCドクター研究員，日本学術振興会特別研究員）

本研究は，都市がそこに住む人々にいかなる心的変化をもたらすか，その変化は異文化や外国人との関係にどのような影響を及ぼすのかについて調べることが目的である。特に，異文化との友好的な関係構築において都市化はポジティブな作用をもたらすと考えられることから，都市的環境下で形成される心的特性と異文化への態度との関連を中心に，都市に見られるさまざ

られているのにもかかわらず、書誌的に研究されたことはなかった。今回、各所蔵機関を回って、一つ一つ比較検討した結果、『讀書録』がどのように読まれ、流布しているのかという客観的事実を明らかにすることができた。

思想という形として捉えにくく、実証しがたいものを書誌という側面からアプローチし、都市文化を考察するのが全体のテーマであり、今回の調査は全体の研究の中で、一つの大きな柱となる部分である。「知」の都市文化的展開を研究するにあたって、『讀書録』という具体的題材を例として、分析することができた。

12. 中島晋平「戦間期における地域社会とマス・メディアの軍縮言説の構造—『呉新聞』の内容分析を事例に—」

本プロジェクトでは、数十回にわたり資料収集を行った。場所、内容等は以下のとおりである。

【調査の概要】

場所：広島県立図書館・国立国会図書館関西館

内容：『呉新聞』および『京都日出新聞』の収集および調査

調査結果：数十回の資料収集のうち、最初の数回は予備調査に属する。すなわち、1920年代に行われた海軍軍縮が地域社会にどのような影響を与え、そのことが地元地方紙の報道内容や主張とどのように関連するのかについて分析するという、本プロジェクトのテーマに適切な資料を選定するための予備調査である。

まず予備調査の結果として、当初第1候補としていた広島県（呉）の地方紙を取り上げることは困難であると判断した。その理由としては、まず中心資料として考えていた『呉新聞』の内容の問題があげられる。確かに『呉新聞』には、当時の呉市の状況が細かく取り上げられてはいるものの、『呉新聞』が元々は当時中国地域を中心に発行されていた『中国新聞』の付録として発行されていたということが端的に示しているように、『中国新聞』の併読紙としての性格が色濃いものであった。そのため、軍縮問題といった地方の枠に止まらない問題は、報道記事も論説記事も主として『中国新聞』で取り扱われ、『呉新聞』では補足的に地域の記事が掲載される程度に止まっていた。その結果、広島県（呉）を対象に新聞の内容分析から地域と軍との関係を考察するためには、『呉新聞』と『中国新聞』の両紙を併せて分析する必要が生じた。このことは調査量の倍増を意味し、現在の自身の研究環境では所定の期間で調査結果を示すことが難しいと判断したため、調査対象から除外せざるを得ないという結論に達した。

したがって予備調査の結果、第2候補としていた京

都の地方紙、『京都日出新聞』を対象にし、以後資料収集を行った。結果として、1920～1923年（計4年）分の新聞記事の収集・分析を行うことができた。また、これと同時に比較対象とする大阪の有力紙『大阪毎日新聞』についても1920～1922年（計3年）分の新聞記事の収集を実施した。

【プロジェクトの成果および課題】

上記の資料収集および得られたデータに基づいて、まず手始めに『京都日出新聞』の軍縮問題に対する姿勢や、それを受け手にどのような形で提示しているかを、世界初の実質的な軍縮条約が成立したワシントン会議を中心に分析を行った。この分析により、地方紙が東京・大阪の有力紙とは異なる軍縮についての解釈や主張を行っていたこと、また一般記事の量的分析などから、受け手に与える軍縮に対するイメージ、また国際政治に対するイメージが有力紙と異なっていたことなどが明らかになった。この成果をまとめ、『都市文化研究』第12号に投稿した。

今後の課題としては、今回の分析によって示された、軍縮や国際政治について地方紙が受け手に提示した解釈が、その後ワシントン体制のなかでどのように変容していくのか、またそうした主張が、1931年の満州事変後の軍や国際政治についての主張や報道とどのような連関を持っているのかについて、分析を行っていくことである。このため、今後も継続した新聞記事の資料収集が必要である。また、今回の分析では、有力紙との比較が不十分であったため、地方紙の特異性を明らかにする意味でも、記事内容について量的および質的な比較分析を行っていかねばならないと考えている。

2009年度ドクター研究員 プロジェクト中間報告

1. 田原憲和「ルクセンブルク共通語（コイナー）研究」

研究協力者：磯部美穂（UCRCドクター研究員）木戸紗織（大阪市立大学大学院文学研究科・大学院学生）

本プロジェクトは、2009年7月に研究会を行った。研究会ではプロジェクト協力者ならびに招待講師による研究報告と議論が行われた。また10月に愛知教育大学より田村建一教授を迎え講演会を開催した。それぞれの催しについての詳細は以下の通りである。

ルクセンブルク語コイナー研究会

2009年7月8日（土）於：大阪市立大学学術情報セン

裏田氏が各研究を行っていたときの状況をふまえたコメントをし、参加者を含めた質疑を行った。報告は以下の6本である（括弧内は論文初出年）。

①齊藤紘子「『日本近世都市下層社会の存立構造』（1984年）を読んで」では、従来は階層として括られてきた都市下層の人々の存在形態について、彼らを公的社会へ媒介する家守や人宿・部屋頭との関係、「日用座」という特殊な座の展開を捉え、構造的に把握する方法の意義を学んだ。②三田智子「『巨大都市における身分と職分』（1987年）について」では、吉田氏の87年時点における下層社会（「振売」層・「日用」層）を軸とした身分の理解を学び、前後の論文とあわせることで、町と諸集団の社会構造的な分析へと進展する画期性が明らかになった。③久角健二「表店と店について」（「振売」1990年、「表店と裏店」1992年）では、研究史上画期的な「表店の発見」を受けて、都市における社会＝空間構造の分析が飛躍的に進んだこと、そこから巨大都市の分節構造論への展開が可能になったことを学んだ。

④山下聡一「吉田伸之氏の市場社会論から学ぶ」（『日本近世の巨大都市と市場社会』1990年、「肴納屋と板舟」1992年）では、市場空間と町屋敷の空間構造の関係性、売場所と売買形態の整理、問屋・仲買仲間が磁極となって分節化する社会構造の捉え方などについて学んだ。⑤山崎竜洋「吉田氏の寺院社会論について」（『都市民衆世界の歴史的位相』1997年、「寺社をささえる人びと」2008年）では、吉田氏の寺院社会論に関する研究を整理することで、巨大都市における寺院社会研究の展開について学んだ。⑥西本菜穂子「『21世紀の「江戸」』（2004年）」では、巨大都市における「消費と廃棄」システムという論点から質屋・古着屋・古道具屋などの「八品商」を検討する意義を学び、報告者が研究する大坂の質屋について、古手売買などに携わる近似的な業態を紹介した。

以上のように、吉田氏は、個別研究を積み重ねるごとに方法論を深化させてきた。その根底には一見微細なものと捉えられそうな事象に対しても、実態に即して徹底的に明らかにしようとする姿勢が貫かれていること、またそれを通して都市社会像をより豊かに描き出すことが可能となり、近世史研究の動向に絶えず新たな視野を広げてきたことを学ぶことができた。取り上げた論文が江戸をフィールドとする研究だったため、議論は主として都市史研究の方法に集中した。しかし、都市全体を大づかみに捉えるのではなく、民衆が生きた実体ある社会から全体像を立ち上げていこうとする志向は、地域史研究の思想と方法にもつながっている。

近年、吉田氏の方法などに学びながら大坂の都市史

研究も大きく発展しているが、そのなかで寺院社会論・神社社会論の研究蓄積の乏しさが自覚され、近代大阪への展開も含めて、さらなる研究の発展へ向けた課題が明確となった。歴史学への向き合い方、歴史分析の方法、具体的な都市史研究の課題など、さまざまな意味でとても有意義なラウンドテーブルであった。

11. 白井順「東アジアにおける薛瑄『讀書録』の読まれ方」

○活動記録

2008年4月～9月、日本の各漢籍所蔵機関において資料調査を行なった。調査を行った所蔵機関は、京都大学文学部・人文科学研究所・前田尊経閣・内閣文庫・国会図書館・蓬左文庫・東洋文庫・中之島図書館である。調査の主な内容は、『讀書録』の各版本の比較と分析である。各所蔵機関で版本調査のために必要なものは複写をした。そのほか4月4日・7月1日と数回に亘って杏雨書屋と前田尊経閣で版本に関する調査を行った。

また、研究経費で購入した藤本幸夫『日本現存朝鮮本研究』を手がかりに、朝鮮本の調査を始め、杏雨書屋などで版本を実見した。8月4～8日、韓国中央図書館・奎章閣・東国大学校に赴き、資料の調査と収集をした。韓国中央図書館では、『讀書録』の各種版本資料を収集した。東国大学校では、デジタルカメラで版本の画像を撮影した。

2008年10月12日、京都大学で開催された第60回日本中国学会にて、「東アジアにおける薛?『讀書録』の読まれ方」を口頭発表した。（所要時間30分）この場での質疑を受けて、再度『讀書録』と『従政名言』の伝来に関して調査するために、11月30日に九州大学へ行き、閲覧して複写した。12月24日・25日は国会図書館、1月5日は内閣文庫で調査を行った。内容は『讀書録』に関連する資料の複写である。

2009年1月に、「東アジアにおける薛瑄『讀書録』の刊行と変容」として、『日本中国学会報』第61集に論文を投稿した。10月に京都大学で口頭発表した内容を推敲したものである。

2009年3月11日、第11回中国近世近代史研究会にて、「東アジアにおける薛?『讀書録』の刊行と変容」を発表した。（所要時間40分）主催者は、井上徹先生で、参加者8名。明清史をテーマとする研究会で毎月1回開催されている。2009年3月29日、日本中国学会論文審査委員会にて、投稿論文「薛?『讀書録』の刊行と変容」の査読審査を受ける。4月1日に、掲載決定と修正箇所要請が届く。10月出版予定の学会誌『日本中国学会報』61集に掲載されることとなった。

○成果

今まで『讀書録』という書物は、東アジア全域で知

筑波大学において開催された2008年度人文地理学会大会において発表し（発表タイトル：「副都心の衰退と更新—大阪市阿倍野筋・昭和町界隈を事例として—」）、現在論文執筆にとりかかっている。

加えて、スタディツアー企画と、地元まちづくりの会との連携を進めていく中で、研究者、地元財界人、開発関係者、商店街関係者らが出会い、今後の開発やまちづくりについて様々な立場から活発な議論が行われたこともひとつの成果である。

こうしたネットワークは申請者の研究のみならず、今後の阿倍野開発にとって一助となることが期待される。ただ、全体を総括するフォーラムを行うに至らなかった点が課題として残されており、2009年度中に開催することとした。

9. 柴田剛「マイノリティとされる人々の『語り』から見る『場所』の記憶—和泉市幸地区に居住する在日コリアン高齢者の体験と語りから—」

1. プロジェクトについて

大阪府内の泉北地域に位置する和泉市幸地区は、旧南王子村以来の系譜を持つ被差別部落であるが、同時に戦前から朝鮮半島出身、あるいは出自を持つ人たちが集住して来た地域でもある。また、被差別部落の領域と在日コリアン集住地区がほぼ重なっており、マジョリティの側から見れば、二重の意味で周縁的な場所であるということが出来る地区である。かつて、この地域には運動団体や市民グループなどの調査が入ったことはあるが、研究者による調査があまり入っておらず、そういう意味ではこの地域の調査・記述それ自体に意味があるのではないかと考え、研究の対象フィールドとして選定した。

調査方法については、在日コリアン高齢者の「場所」や「地域」にまつわる「記憶」や「語り」が主な関心であったため、当事者に対する聞き取り調査を行った。

2. フィールド調査

フィールドワークを2008年7月から8月にかけて行った。和泉市内にある民族団体が運営している福祉施設である「ムグンファハウス」（民団泉北支部）および「同朋長寿マダン」（朝鮮総連泉州支部）の協力を得て、利用者の方々にご自身の「生活史」や場所にまつわる「記憶」についての聞き取りを行った。聞き取りに際して、こちらの不躓な質問などがあったにも関わらず、インフォーマントのみなさんは自らの体験を語って下さり、「生活史」の興味深い事例を語って頂いた形になった。

結果として、12名の方に聞き取りを行ったが、一世の世代だけでなく、二世の世代も高齢化しており、も

う少し多くの方の聞き取り事例を蓄積する必要があると感じている。

3. プロジェクトの成果

聞き取りした「生活史」の事例に関して、2008年度人文地理学会大会一般発表（11月9日、於：筑波大学）において「『場所』をめぐる生活者の「記憶」／「物語」」というタイトルで発表を行なった際に、事例として引用した。

D研究員プロジェクトの期間は終了したが、インフォーマントの年齢的な問題もあるので、継続して聞き取りを行ない、少しでも「生活史」の事例の蓄積を目指して行きたいと考えている。また、現在、聞き取り結果を基に、対象地域である和泉市幸地区に居住する在日コリアン高齢者の「生活史」、及び「場所」／「記憶」の関係をめぐる考察を行なっている所であるが、近い時期に学会誌への投稿を行なうべく、論文としてまとめている。

さらに、在日コリアン高齢者への聞き取りを行なう中で、「記憶」／「場所」をめぐる関係の理論的側面についても関心を抱く様になった。この部分については、「『場所』／「記憶」／「物語」」という論考を『空間・社会・地理思想』12号（本学地理学教室発行）に発表した。

4. 残された課題

先にも述べたが、二世の世代の多くが高齢者となっており、「記憶」や「体験」が風化していきつつある。D研究員プロジェクト期間の終了後も聞き取り事例の蓄積を続けていく必要がある。

10. 山崎竜洋「近世都市史研究の方法を学ぶラウンドテーブル」

本プロジェクトは、近世都市史研究・地域史研究をリードする吉田伸之氏（東京大学）の業績を検討し、吉田氏を囲んだラウンドテーブルを行うことで、近世都市史研究・地域史研究に対する理解を深めることを目的としたものである。

まずラウンドテーブルに向けた準備として、論文輪読会を2008年9月～12月に計5回開いた。日本近世史専攻の大学院生を中心に、報告者自らの研究の問題関心と関連する吉田氏の研究論文を取り上げ、報告・討論を行った。ここでは論文を精読してその成果を学ぶとともに、近世史研究全体の潮流の中での研究史的意義について理解を共有することに努めた。

ラウンドテーブルは、2009年1月10日に大阪歴史博物館第2研修室において開催した。参加者は16名で、学外から大阪近辺の日本近世史研究者・近代都市史研究者の参加もあった。羽田真也氏を司会として、各報告者が準備会での議論をもとに報告した。その後、吉

(2) 戦後占領期のスタイルブック、(3) 『アンアン』、(4) 江戸期、明治期以降の和服などが、ファッション雑誌の起源として取り上げられる傾向がみられた。しかし、それらを起源とする「ファッション雑誌史」においては、政治的主張のない「ファッション雑誌」は軽んじられ、図書館でも収蔵されていないことが多い。また雑誌を出版した当事者による自伝的な回顧から「ファッション雑誌史」がつくられてしまう可能性もある。これに対し、ファッション雑誌の読まれ方や読者集団の変遷についても考える必要が指摘された。

研究成果：井上雅人、2010年、「日本における『ファッション誌』の生成」『都市文化研究』第12号特別寄稿

【第3回研究会】2009年1月24日、於：大阪市立大学文化交流センター

タイトル：「サブカルチャーとスタイル」

招聘研究者：成実弘至（京都造形芸術大学芸術学部）

議論の内容：本報告は、サブカルチャーのグローバル化についての比較研究の欠如という現状認識の下、1960年代以降の日本とイギリスのサブカルチャーの同時代性について考察を深めてきた研究者によるものである。

60年代以降、両国のサブカルチャーには共通の「スタイルの意味論」が認められるようになる。すなわち60年代前半の「ダンディズム」（モッズ・六本木族・みゆき族・原宿族）、60年代後半・70年代前半の「ボヘミアン」（ヒッピー・フーテン）、70年代後半の「アウトロー」（パンク・暴走族）などである。80年代以降はスタイル主体のサブカルチャー集団の消滅が明らかになる。この点については、サブカルチャー／スタイルが「アイデンティティか、マスカレードか」をはじめ今後の研究の方向性が示唆された。

研究成果（関連書籍の出版および書評の執筆）：成実弘至編、2009年、『コスプレする社会』せりか書房、石田佐恵子「書評『コスプレする社会』」『週刊読書人』2009.9.4号

8. 川口夏希「大阪市阿倍野地区における新しい都市空間創出に関する連続的オープンフォーラム計画」

1. プロジェクトの概要

現代の日本の大都市では、ベクトルの異なる様々な担い手による新たな商業空間の創出や都市更新・再生の動きが見られている。こうした動きの中、大阪市阿倍野地区では、官主導の大規模な再開発、民間主導型の開発と小資本経営者の参入、長屋のコンバージョンによるまちづくりの取り組みといった三者三様の空間

変容が同時に進んでいる。

本プロジェクトでは、1. フィールド調査により、同地区の変容過程を辿り、2. 阿倍野の生態と更新の系譜を明らかにするため、異なる立場のキーパーソンとのネットワーク形成と地区の歴史の掘り起こしを目的としたスタディツアーを行った。さらに、その過程で阿倍野を拠点とするまちづくりの会「ASSUの会」に参加し、連携を進めた。

2. フィールド調査

調査対象としたのは近鉄百貨店が牽引する開発と、小資本経営者による自然発生的な空間変容の動きが見られる阿倍野筋東側（阿倍野筋1-2丁目、松崎町2-3丁目）である。2008年8月30日-9月1日にかけてフィールド調査を行い、同地区の過去20年の変化を明らかにした。その際、和歌山大学観光学部学生の調査協力を得た。その結果、1998年から2008年にかけて、とりわけ大きな変化が起きていることが確認された。例えば、近鉄グループのファッションビル「阿倍野Hoop」と「&」周辺の商業施設の増加、大型マンションの建設、大通りから裏へ入った好適な住宅地や入り組んだ路地中でデザイン性の高い外観のカフェや美容院といった店舗が出現したことが挙げられる。

3. スタディツアー

2008年11月7日に阿倍野区松崎町周辺を対象に第1回スタディツアーを行った（有恒会副会長福岡美彦氏、阿倍野ベルタ商店街振興組合山下雅洋氏、近畿日本鉄道（株）中井公一氏・西矢里子氏、大阪市立大学水内俊雄教授、黒木宏一氏、島崎雄貴氏が参加）。1942年の航空写真と1958年の住宅地図を手に対象地区を歩く中で、地図上には表されない地区の歴史や昭和初期のホワイトカラーに選好された好適な郊外住宅地という阿倍野区の特性和地域の資産が再認識された。

申請者はさらに、阿倍野を拠点とするまちづくりの会「ASSUの会」に参加し、メンバーである地元建築家や職人（建具、ガラス等）、研究者等らと連携してプロジェクトを進めた。

11月24日に企画したスタディツアーには同会と大阪市立大学から4名が参加した。雨天のため、阿倍野区出身の森本成毅氏（ASSUの会）の生活史に関する聞き取りが中心となったが、森本氏の体験から、1940年代から現在にかけての阿倍野区と住民の生活の変遷過程が明らかとなった。11月30日のスタディツアー（ASSUの会主催・参加者10名）では、現在の地図と1942年の航空写真を手に住吉大社周辺を歩き、参加者と阿倍野・住吉地域のポテンシャルや長屋の活用についてディスカッションを行った。

4. プロジェクトの成果

本プロジェクトの成果の一部は、2008年11月9日、

ビュー調査を「学校教育過程における福祉教育実践についてその促進要因、阻害要因に関する体験や考えは何であるか」のテーマのもとに実施した。全体として、データの再試が必要であることが明らかになったことから、以後再試を行う予定である。

6. 古野貢「戦国期畿内政治史および都市史を再検討するための軍記史料『細川両家記』研究」

研究協力者：藤本史子（大手前大学）、藤本誉博・稲垣翔（以上、大阪市立大学大学院文学研究科・大学院学生）

1. プロジェクトの目的、成果、課題

- ①目的：戦国期畿内政治史・都市史研究において、頻繁に利用されてきた『細川両家記』の史料批判を通じて、新たな戦国期畿内研究の視点を提示すること。そのために複数の写本の校合作業、書誌学的検討、記録史料・一次史料との比較、考古学的成果からの検討を行う。
- ②成果：(1)校合作業：今回対象とした9種類の写本は、共通の原本を書写した、成立の過程で複数の本の情報を取捨選択したなど、いくつかの系統に分かれることが判明した。(2)書誌学的検討：(1)写本の校合作業と連動するため、十分進んでいない。(3)記録史料・一次史料との比較：『細川両家記』は記述内容に偏りがある。記録史料・一次史料との比較によって相対化をはかり、より精密な歴史像の構築を図った。(4)考古学的成果：各地の発掘成果を入手し、『細川両家記』の記述と参照して蓋然性の高い成果を追求。
- ③課題：(1)校合作業：上記9種以外に存在する写本との校合。(2)書誌学的検討：系譜関係、表現・字句の異同など、国語学的検討作業の組み込み。(3)記録史料・一次史料：比較検討による、さらなる精密な相対化を図る。(4)考古学的検討：都市部における発掘成果に基づき、今後も協業。

2. 研究会・勉強会などの行事

- ①研究会：ほぼ毎週1回（火曜日）、大阪市立大学文化交流センターにおいて、校合作業・史料との比較検討などの研究会をおこなった。
- ②行事：「戦国期畿内研究の再構築と『細川両家記』」と題し、2009年1月24日に大阪市立大学学術情報総合センターにおいてドクター研究員プロジェクトシンポジウムを開催した。報告者は古野・村井・天野忠幸（日本学術振興会特別研究員）・藤本史・藤本誉・小谷利明（八尾市歴史民俗資料館）・西島太郎（松江市教育委員会）。戦国期畿内政治にかかわった細川氏・三好氏・畠山氏・六角氏の活動、それぞれについての研究動向と『細川両家記』との関係、考古学的成

果、および研究会で得た書誌学的成果について報告し、それぞれの成果の連動と今後の展望についてパネルディスカッションを行った。

3. 調査

研究会で用いたもの以外の写本について、所在地、調査手続きの方法など、次年度以降の調査活動に向けての準備を行った。

4. プロジェクトの成果公表

上記シンポジウムの成果を、『都市文化研究』12号に掲載した。プロジェクトの趣旨説明、各報告の内容、パネルディスカッションの内容など。

7. 松田いりあ「現代都市とファッション文化の創造的コンタクト／コネクト」

【第1回研究会】2008年8月9日、於：大阪市立大学文化交流センター

タイトル：「1970年代以降のファッション雑誌をめぐる」

招聘研究者：難波功士（関西学院大学社会学部）

議論の内容：雑誌研究の先行研究を「ジェンダー研究」「メディア史研究」「送り手側からの雑誌史研究」と分類した上で、「誌面は社会意識の反映か」「文化産業・意識産業による操作か」という両極端な視点に陥ることなく、雑誌の「創刊」という行為を考える意義が考察された。事例としてファッション誌ないし若者誌が取り上げられたのは、その創刊点数の多さと興廃の速さが、社会の変化の鋭敏な指標とみなしうることによる。報告では、年次別創刊・休刊、出版指標年報などの各種統計を参照しながら、1970年代以降に創刊された雑誌が時系列に網羅され、それらの創刊をめぐる背景が類型化、分析された。

研究成果（関連書籍の出版）：難波功士、2009年、『創刊の社会史』筑摩書房

【第2回研究会】2008年11月8日、於：大阪市立大学文化交流センター

タイトル：「1970年代以前のファッション雑誌をめぐる」

招聘研究者：井上雅人（京都精華大学人文学部〔当時〕、現・武庫川女子大学生活環境学部）

議論の内容：わが国におけるファッション雑誌の起源の問題が考察された。1970年代以前という時期は、既製服が普及する前ということもあり、「洋服は（洋装店で）仕立てるか、ミシンを使って（自分で）縫うもの」（赤木洋一、2007、『アンアン1970』）であった。したがってこの時代区分そのものが「ファッション雑誌とは何か」という問いを提起することになる。

先行研究では、(1)戦前の『服装文化』『装苑』、

ルクセンブルクにおける特殊性の原因についての議論が報告者と参加者との間で交わされた。結論には至らなかったが、いくつかの仮説を立てることができ、その検証が今後の課題として残された。

シンポジウム「ルクセンブルクの言語文化と言語意識」

(参加者42名)

2008年12月13日(土) 於：京都産業大学

基調講演 ジャン＝クロード・オロリッシュ(招待講師、上智大学)「現代のルクセンブルクにおける言語文化とルクセンブルク人意識」

パネリスト(報告順)：田原憲和、小川敦、木戸紗織、田村建一(外部講師、愛知教育大学)

本シンポジウムでは、基調講演のテーマに沿って各パネリストが研究報告を行い、その後には講演者を含めたディスカッションが行われた。パネリストによる個別事例とルクセンブルク人である講演者の実体験を交えた議論により、ルクセンブルクにおける曖昧ではあるが確かに存在する言語観、民族意識についての共通認識が生まれた。

5. 広瀬美千代「都市部の小学校における福祉教育実践過程の検証—教師に対するインタビュー調査から—」

1) 2008年9月、大阪市研修情報センターにて、大阪市の家族会の方々を中心に研究会を開き、「地域福祉実践課程における小学校での介護者による『体験語り』提案と実施に向けて」というタイトルにて意見交換を行った。看取り者が、実際に介護体験で得た貴重な体験や実感を小学校における総合学習の時間にゲストティーチャーとして、児童に語りかけを行うことにより、高齢者に対する尊厳や福祉への関心を高めていくことをねらいとした。フロアからは、今後小学校と家族会との連携を行うコーディネーターが必要であるとの意見が出された。

2) 査読論文として以下の2報が採用された。

① Factors related to Cognitive Caregiving Appraisal by family caregivers: The positive and the negative aspects of caregiving, Michiyo Hirose, Shinichi Okada, Masakazu Shirasawa, Japanese Journal of Social Welfare, 2009年9月刊行予定

[概要] 家族介護者の会員に対する量的調査の結果から、介護者の精神的側面を構成する介護に対する肯定的な認知と否定的な認知の関連性および、両側面における関連要因の特徴を明らかにした。

② 「家族介護者の『生きられた世界』における語りの検証—現象学的アプローチにおける質的分析を通じて(2009) 広瀬美千代、『介護福祉学』16(1), 88-96.

[概要] 家族介護者へのインタビューデータを現象学的アプローチにて、質的分析を行い、介護者のアン

ビバレントな精神的側面を支えている個々の人生観、価値観をマスターテーマとしてとらえた。

3) 報告書として、以下の2報を著した。

① 「福祉人材の確保と養成—現状と課題—」第2章「課題への取り組み—課題解決のための具体的な方策」第4章「福祉人材養成と地域福祉—地域における福祉教育の基盤形成に向けて」広瀬美千代 ほか協議会担当者、大阪市福祉人材養成連絡協議会、2008年4月

[概要] 福祉教育の拠点として小学校区単位とした住民参加を中心とした地域活動、学校内におけるカリキュラムとしての福祉教育、社会福祉協議会による福祉色の強い福祉教育実践とそれらの連携に視点をあてて論じた。

② 「ジェロントロジカル・ケアサイエンスの研究拠点形成研究報告書—Positive and negative segments of “Cognitive Caregiving Appraisal” by Family Caregivers in the context of Social constructionism」大阪市立大学大学院、生活科学研究科、2008年3月

[概要] 介護者のアンビバレントな精神的側面の検討には、社会構成主義の立場から、語りからカウンターナラティブを構築していくことで、新たなソーシャルワークの実践モデルが提示できることを論じた。

4) 学会発表として以下の3報を発表した。

① 「家族介護者の『生きられた世界』における語りの記述：現象学的心理学の視点からの質的分析」広瀬美千代(単独)、第50回日本老年社会学会大会、大阪、報告要旨集p.220、2008年6月

② 家族介護者の精神的健康に関連する内的資源要因—介護に対する肯定的評価と対処スタイルに焦点をあてて、広瀬美千代(単独)第56回日本社会福祉学会大会、岡山、報告要旨集、2008年10月

③ 夜間介護を行う家族介護者に対する一考察—心理的要因からのアプローチ、広瀬美千代(単独)第13回日本在宅ケア学会、大阪、報告要旨集P89、2009年3月

[概要] 以上、3報は、家族介護者の精神的側面を肯定・否定両側面で捉えた研究(博士論文)の課題への追試結果である。①は質的分析で、量的分析の結果を別の角度からそのアンビバレンス性の確認を行った。②は介護の肯定的評価やコーピングスタイルがうつに対しても軽減効果があることを示した。③においては、夜間介護を行う介護者は、積極的な対処スタイルでうつを回避していることが明らかになった。

5) UCRCにおける研究課題を目的として調査を行った。

2009年2月に小学校教員6名、高校教員6名へのイン

第4回研究会（2008年10月30日）は、竹内峠越えの踏査で、参加者は3名である。竹内越えは、難波大道（推古朝）から竹内峠を越えて、横大路と直結する国家の幹線道路と位置づけられる。しかし、標高が高いのが難点である。**第5回研究会**（2008年11月4日）は、大坂越えの踏査で、参加者は3名である。大坂越えは、竹内峠に比べて標高もそれほど高くなく、比較的道幅もとれる迎接にも適した道であるとの印象をもった。**第6回研究会**（2009年1月18日）は、大和川の旧流路の踏査で、参加者は6名である。変遷の激しい河川流路がその都度道になっていくという阪田説が、近世絵図で証明できた。**第7回研究会**（2009年1月23日）は講師招聘研究会で、大阪市立大学1号館において、阪田育功氏（大阪府立狭山池博物館学芸主査）に「大和川流域の河川流路変遷と河川交通」という題で報告いただいた。報告内容は、段階的に大和川の流路変遷を試みたもので、注目すべきは、各時代と各地点を立体的に表示させた点である。討論では、河川と道路との交差点の状況など、考古学・歴史学問の見解を確認するような内容が目立った。この報告により、河川流路も総体的に見る必要があると強く意識させられた。参加者は5名である。

第8回研究会（2009年3月3日）は、龍田越えの踏査で、参加者は4名である。龍田越えの道は、道路幅や高低差ともに迎接道として問題なからうが、やや距離が長い。

第9回研究会（2009年3月21日）は、竹本が「大和地域の古道」と題し、大阪市立大学学術情報総合センターにて報告した。参加者は4名である。大和国側の道路遺構についての報告と、研究会全体を通しての議論を行った。

今回実際に現地を踏査したことで、迎接道としてのルートを再考するためのよい判断材料となった。さいごに課題を述べると、阪田説を検討することによって、古代道路が不動ではなかった可能性が出てきた。今後根本的に見直してみる必要がある大きな問題である。

なお、本プロジェクトの成果を含むものとして、以下のものを執筆した。

- ・竹本見「遣隋使と冠位十二階の制定」（柏原市歴史資料館編『夏季企画展展示図録 裴世清の見た風景—1400年前の大和川—』2008年7月）。
- ・JR西日本編『駅から散策ECOマップ（天理・桜井・高田）』2009年3月（竹本分担執筆）。

4. 田原憲和「ルクセンブルク語コイナー（共通語）研究会」

本プロジェクトは、2008年8月と11月に研究会を、12月にはシンポジウムを開催した。研究会ではプロ

ジェクト協力者ならびに招待講師による研究報告と議論が行われた。またシンポジウムでは、研究協力者以外の研究者にもパネリストを依頼し、基調講演、パネリストによる研究報告ならびに聴衆も交えた議論が行われた。それぞれの催しについての詳細は以下の通りである。

2008年度 第1回ルクセンブルク語コイナー研究会 （参加者7名）

2008年8月9日（土）於：大阪市立大学学術情報センター

報告1：田原 憲和（プロジェクト代表者）「ルクセンブルク語の「発見」とディックス・レンツ正書法」

報告2：小川 敦（招待講師、一橋大学）「第二次世界大戦以降のルクセンブルク語とルクセンブルク人意識—単一言語性か多言語性か—」

報告3：木戸 紗織（研究協力者、大阪市立大学大学院文学研究科・大学院学生）「ルクセンブルクにおけるアイデンティティのグローバル化とローカル化」

本研究会ではルクセンブルクにおける言語観、民族意識の変遷という統一テーマに則り、報告が行われた。隣国であるドイツやフランスにおける言語観、民族意識とは大きく異なるため、ルクセンブルクにおけるそれらの特殊性について参加者と議論が交わされた。この議論を通じ、ルクセンブルクにおける言語観と民族意識はドイツやフランスのそれとは大きく異なり、曖昧で相対的なものであるという認識が報告者ならびに参加者の間で共通のものとなった。

2008年度 第2回ルクセンブルク語コイナー研究会 （参加者6名）

2008年11月8日（土）於：大阪市立大学高原記念館

報告1：木戸 紗織「ルクセンブルク語版Wikipedia に見るルクセンブルク人アイデンティティの表出」

報告2：小川 敦「ルクセンブルクにおける言語意識言説の二面性—戦後期の特異性（そして連続性）とは何か—」

報告3：田原 憲和「ルクセンブルク語コイナーと正書法」

本研究会では前回の議論をふまえ、ルクセンブルクにおける言語観、民族意識の顕在化という統一テーマを掲げ、研究報告と議論がなされた。19世紀から21世紀のルクセンブルクにおける言語観、民族意識の顕在化の一例として、ルクセンブルク語版Wikipedia（オンライン百科事典、2000年台）、知識人による言説（1940年台後半～1960年台）、ルクセンブルク語正書法（1820年台～1890年台）が取り上げられた。どの時代においてもルクセンブルクにおける言語観と民族意識は周辺国とは異なり、明確なものではなく、それらは国民の共通認識となるに至っていない。このような

2. 王標「文化的秩序の再建と都市景観の形成 —中国知識人社会と地域名勝の相互作用—」

2008年度の本プロジェクトでは雷峰塔の再建について考察した。

雷峰塔の再建をめぐる、賛否両論の論争は今もまだ続いている。その原因は、雷峰塔にまつわる有名な民間伝説「白蛇伝」—美女に化した白蛇と若者の恋物語—が存在しているからである。その恋物語の結末として、白蛇は法海禪師という高僧に調伏され、雷峰塔下に埋められる。「白蛇伝」は後に崑曲・秦腔・京劇などの演劇に多く採り入れられ、時代とともに様々なヴァリエーションを生み出し、異類交婚譚のもつ悲劇性を超えて男女の愛情が謳われ、中国大衆演劇の代表的な演目となっている。それ故に、雷峰塔が倒壊した時、中国近代の文豪・魯迅は「雷峰塔の倒壊を論ずる」(1924年)の中で「いま、それはついに倒れた。天下の人民の喜びはどんなだろう」と歓呼した。以来、民衆圧迫の象徴である雷峰塔の倒壊は、すなわち封建主義的権威崩壊の記号として人々に解釈されている。

実は、雷峰塔が倒壊する以前、「雷峰夕照」と「白蛇伝」はそれぞれあまり関係のない二つの言説の系譜に属していた。つまり一つは雅文化であり、もう一つは俗文化である。ところが、現在、観光開発の文化的戦略を目指し、政府や開発業者それに専門家たちはこの二つの文化をセットとして売り出した。雷峰塔の再建およびその文化的位置付けについて多大な論争(言説の混乱)を引き起こした原因は、おそらく政府が文化的資源を利用する際の「二重構造」にある。つまり、新しい観光資源の開発に迎合するため、建造物としての雷峰塔は封建勢力の象徴としての呪縛から解放される一方、「白蛇伝」は依然として圧迫に反抗し、男女の自由な愛情を追求するという基調に縛られ、その反封建主義的思想は未だに脱構築されていない(再建された雷峰塔は浙江省の愛国主義教育の基地となっている)。本プロジェクトはまず文化的景観と社会的変遷の角度から「夕照」と「鎮圧」という二つの言説の系譜を整理し、それを通して文化が経済発展の重要な資源となる際、それ自身がどのように変貌するかを明らかにする。

方法論として、大阪市立大学地理学教室山崎孝史先生の2008年度後期地理学講読演習—大阪市立大学都市文化研究センターの研究支援事業の一環として—に参加することをきっかけに、文化地理学者Tim Oakes氏の一連の中国観光開発と文化統治に関する論文を読み、その方法論に大いに啓発された。

研究方法として、まず、文献学的調査を踏まえ、明代の『西湖遊覧志』・『西湖夢尋』・『袁宏道集』・『儒林

外史』や清代の宮廷絵師が描いた『西湖行宮図』

(2008年度D研究プロジェクト研究費で購入したものである)などの文献資料、とりわけ大正時期の日本人観光客が残した貴重な西湖遊記(芥川龍之介「江南遊記」や諸橋徹次『遊支雑記』や竹内逸『支那印象記』や徳富蘇峰『支那漫遊記』など)を駆使し、後世の遊覧者が如何にして文人雅士の眼差しを模倣し、彼らの風雅な哀愁を複製したかを明らかにし、雷峰塔に関する歴史的記憶を再現した。

また明代の白話小説「白娘子永鎮雷峰塔」や清代の演劇作品『雷峰塔伝奇』(梨園旧本、黄因珖の看山閣刻本、方成培の水竹居刻巾箱本)を分析し、明清時代の「白蛇伝」の系譜伝承を探り、さらに民国以降の白蛇伝に関連する文学や演劇や映画などの作品(田漢の京劇『金鉢記』・『白蛇伝』や李碧華の小説『青蛇』など)が結末部分で雷峰塔を如何にして扱うか—倒壊させた否か—その扱う方法を整理し、雷峰塔の「鎮圧」から「解放」の系譜を紐解いた。

本プロジェクトの研究成果として、第63回大阪市立大学中国学会(2008年12月13日、於：大阪市立大学文化交流センター)において「雷峰塔はいつ、なぜ倒壊したか—文化的景観の系譜学的アプローチ—」と題して研究報告を行った。2009年の内に、『杭州師範学院学報』に投稿する予定である。

3. 竹本晃「東アジアと日本古代都城をつなぐ道を探る —外国使節の迎接地—」

研究協力者：酒井健治・渡部陽子・濱道孝尚(以上、大阪市立大学大学院文学研究科・大学院学生)

本プロジェクトは、迎接地という観点から古代道路を見直すことで、難波から都までを外国使節の迎接地として把握し、国家がどのような条件をもって道の選択をしたのかを見極めることをねらいとする、踏査を中心とした研究会である。以下、内容を簡略に述べる。

第1回研究会(2008年7月20日)は、関屋越えの踏査で、参加者は5名である。所要時間は短い、道幅が狭く迎接地としては貧弱感が否めない。第2回研究会(2008年9月21日)は、田尻越えの踏査で、参加者は6名である。関屋越えよりやや時間を要するが、道は安定し、迎接地として十分通用するとの印象をもった。第3回研究会(2008年9月22日)は講師招聘研究会で、大阪市立大学1号館において、安村俊史氏(柏原市立歴史資料館学芸員)に「河内国大原郡の古代交通」という題で報告いただいた。報告内容は、諸分野を総合的に考察したもので、討論は龍田道のルートに集中した。なかでも『万葉集』からのルート復元がどこまで可能かなどが焦点となった。参加者は8名である。

5. 早川美晶「モルドヴァ地方の教会堂壁画、通称〈コンスタンティノーブル包囲〉(16世紀)の研究」

本研究の対象である教会堂壁画、通称〈コンスタンティノーブル包囲〉調査のため、9月18日から10月13日にかけてルーマニアに滞在した。まずブカレスト・G.オプレスク芸術史研究所にて、当該図像に関する先行研究文献の調査や、モルドヴァのポスト・ビザンティン美術を専攻する研究者と交流することで情報収集を行い、その後モルドヴァ地方にて現地調査を行った。訪れたのは、フモール修道院・生神女就寝聖堂、モルドヴィツァ修道院・生神女福音聖堂、アルボレ教会・洗礼者イオアン斬首聖堂、プロボタ修道院・聖ニコラエ聖堂、スチャヴァの新イオアン(Sfântul Ioan cel nou de la Suceava)修道院・聖ゲオルゲ聖堂である。

通称〈コンスタンティノーブル包囲〉は、元来〈アカティストス生神女讃歌〉という主題の図像の一モチーフである。ただし16世紀モルドヴァ地方でのみ、この通称〈コンスタンティノーブル包囲〉が組み込まれる〈アカティストス生神女讃歌〉が制作されており、ポスト・ビザンティン美術における16世紀モルドヴァ地方の独自性を示すものと位置づけられる一面がある。日本にしながら入手できる写真資料では、通称〈コンスタンティノーブル包囲〉の部分写真であることが多く、元の主題である〈アカティストス生神女讃歌〉との対比を検討することや、当該図像がそもそも教会堂壁面のどこに描かれているのか把握することに支障があったが、今回の現地調査により状況が改善されつつある。

また通称〈コンスタンティノーブル包囲〉はフモール修道院とモルドヴィツァ修道院の作例が有名であるものの、その他の作例の存在は少なくとも日本においてはほとんど知られていない。これまで早川はこの2つの修道院に加え、アルボレ教会にも作例があることを把握していたが、今回の現地調査でさらに2つの作例を知り、実物を目視し、写真におさめた意義は大きい。通称〈コンスタンティノーブル包囲〉がフモール修道院とモルドヴィツァ修道院だけに現れる特異なモチーフではないことを提示するためである。フモール修道院とモルドヴィツァ修道院以外の作例は損傷が激しく、特にスチャヴァの新イオアン修道院の場合はかろうじて痕跡がわかる状況であるのが残念だった。

現在収集した資料の整理を行い、また今回の現地調査で新たに当該図像の存在を知ったプロボタ修道院とスチャヴァの新イオアン修道院に関して情報を集めている。上記の5つの作例において、通称〈コンスタンティノーブル包囲〉がどのように描かれているのかを

把握し、叙述することが目下の課題である。

なおこの現地調査においてルーマニア・ユネスコ協会クラブ連盟会長ダニエラ・ポベスク氏およびスチャヴァ・シュテファン大公大学電気工学部准教授ダン・ミリチ氏より多大なる協力を得たことを追記しておく。

*研究テーマ(タイトル)は、より内容に即したものにするため、採用時から変更した。

6. 小林聡明「GHQ占領期大阪における在日朝鮮人メディアの歴史社会学的研究」

1. 研究の概要

本研究プロジェクトは、朝鮮半島と密接な関係を持つ大阪において、在日朝鮮人が立ち上げたメディア(新聞や雑誌)の動態について、GHQ占領期に照準して分析しようとするものである。

2. 資料調査

本研究を進めて行くにあたり、最も重要な史料群は、国立国会図書館憲政資料室に所蔵されるGHQ文書(米国国立公文書館)およびプランゲ文庫(メリーランド大学)所蔵の新聞・雑誌である。今年度の前半は、まず、GHQ占領期に在日朝鮮人が、どのような雑誌を刊行していたのか、その特定作業をおこなうべく、日本・米国で資料調査を実施した。

①米国調査:2009年9月

米国国立公文書館:軍・民間文書の収集(RG331, RG554, RG59)

メリーランド大学プランゲ文庫:資料整理状況の調査

②東京調査:随時

国立国会図書館憲政資料室:RG331文書およびプランゲ文庫資料の調査

以上の資料調査を通じて、これまで明らかになっていなかった、在日朝鮮人が発行にかかわっていた雑誌が多数発見された。今後は、大阪における雑誌の発行状況を解明し、大阪という都市の特徴を、在日朝鮮人メディアとの関係で明らかにしていきたい。

3. 成果公表(本研究プロジェクトに関連する主なもの)

①口頭発表「1940年代後半における日韓の人の移動と米軍による監視」『歴史の視角から見る“東アジア世界”のアイデンティティと多様性』東アジア史研究者フォーラム、東北亜歴史財団、ソウル、2009年11月5-6日

②口頭発表"Korean Migration and Media during the US Occupations of Southern Korea and Japan, 1945-1948", Second International Conference of the Japanese Studies Association in Southeast Asia, 22-23 October 2009, Vietnam Academy of Social Sciences, Hanoi, Vietnam

- ③口頭発表「在日朝鮮人雑誌に見る検閲の実態－雑誌『民主朝鮮』を中心に」プランゲ文庫と東アジア研究会，神奈川大学人文学研究所，2009年10月19日
- ④口頭発表"Korean Border-Crossing and the Media during the US Occupations of Southern Korea and Japan, 1945-1948"，国際発信力育成インターナショナルスクール，大阪市立大学大学院文学研究科，文部科学省大学院教育改革支援プログラム，2009年9月15日
- ⑤論文「GHQ占領期在日朝鮮人雑誌に関する書誌的研究」『人文学研究所報』No.43，神奈川大学人文学研究所，2010年（掲載決定）

7. 西尾泰広「ダニエル・ポッツマン著 "Punishment and Power in the Making of Modern Japan" (Princeton UP) を精読し書評する日本近世史・近代史合同研究会」

研究協力者：山崎竜洋・山下聡一（以上，UCRCドクター研究員），岡本一也，中森晶子，久角健二，松本勇介，三田智子，齊藤紘子，藤井正太（以上，大阪市立大学大学院文学研究科・大学院学生），ヤニック・バルデイ，ジョン・ポーター

本プロジェクトでは，日本近世史・近代史専攻のUCRCドクター研究員と院生が合同研究会を組織し，日本近世史研究者ダニエル・ポッツマン氏（ノースカロライナ大学チャペルヒル校・歴史学部准教授）の著書 "Punishment and Power in the Making of Modern Japan" (Princeton UP, 2005) の内容理解に取り組み，著者を交えた書評会を企画・開催した。

同書は，日本近世・近代の刑罰制度の変遷について，戦後アメリカの日本史学界の主流であった近世社会の中に近代文明の起源を捜す「近代化論」的な見方を批判し，世界的な帝国主義と直面するなかで刑罰や刑務所の制度改革が模索された過程を検討している。

近世・近代の刑罰制度を一貫した展望のもとに検証した点が同書的方法的特徴であるが，これは，時代別の研究体制が一般的な日本の近世や明治期の社会・政治史研究にとって重要な方法的提起である。そこで本プロジェクトでは，邦訳版刊行（邦題『血塗られた慈悲，笞打つ帝国』インターシフト，2009年10月）に先立って原書での精読に挑み，著者の来日に合わせて「近世・近代史合同書評ラウンドテーブル」を開催することにした。

「ラウンドテーブル」にむけて，原書読解の節目としての準備会を2回開催した。まず準備会Ⅰ（6月24日，於：大阪市立大学）では，同書の理論的枠組みが示された序章を取り上げ，著者の研究手法や問題意識を正確に理解することにつとめた。英文の読解には困難も伴ったが，一字一句疎かにせず丁寧に解釈すること

で，著者の緻密な論理展開を余すことなく把握できた。参加者は，ここで共有した同書の骨格を踏まえて，実証が展開される1～7章の内容理解を進めた。そして7月2日の準備会Ⅱ（於：大阪市立大学）では，章ごとに担当者を決めて，論点整理など「ラウンドテーブル」にむけた準備報告を行った。

以上の準備を踏まえて，7月12日著者を招いてラウンドテーブルを開催し（於：大阪市立大学文学部），研究協力者や他大学の院生なども含めて17名が参加した。当日は，午前中に各章の内容と論点について研究代表者・協力者が分担して報告し（齊藤紘子〔序章・終章〕，久角健二〔1・2章〕，岡本一也〔3章〕，山下聡一〔4章〕，藤井正太〔5章〕，羽田真也〔6章〕の各氏と西尾〔7章〕），それらに対する著書のリプライがなされた。午後は同書の全体について，プロジェクトの研究協力者ジョン・ポーター氏と指導教員の塚田孝氏がコメントした。両氏のコメントを受け，最後に同書全体に関する討論を行った。

著者の同席を得たことにより，氏の研究方法や問題意識を著者自身から直接学ぶことができ，アメリカにおける日本史研究の動向や，19世紀の社会史を研究する上での課題や論論点についても議論を深めることができた。今後は，準備会と「ラウンドテーブル」を通じて学んだことをまとめて，書評として公表したい。

8. 根来麻子「歌謡史の構築および早歌の研究」

(1) プロジェクトの概要

日本文学史上，歌謡は和歌とともに大きな位置を占めてきたが，和歌に比べて研究が手薄であり，近隣分野の研究者の関心も薄いといわざるを得ない。そこで本プロジェクトでは，歌謡に関する知識習得を計り，そこで得た知見を各自の研究に反映させることを目指す。プロジェクト推進の手段として，定期的に研究会を行う。研究会は基本的に，「『日本の歌謡』（双文社出版，1995年）輪読」と「『宴曲集』輪読」の二部体制を予定している。

(2) 研究会報告

第1回研究会 2009年4月29日 於：大阪市立大学文学部

第一部（『日本の歌謡』を読む）発表者：田中寛子，「歌謡研究の方法」

第二部（『宴曲集』輪読）発表者：大坪亮介，「『宴曲集』下「霊鼠誉」」

第一部では，歌謡史を通観するためのイントロダクションとして，田中寛子氏が「歌謡とは何か・どういった研究方法が可能か」などについて，研究史と今後の課題について概説した。第二部では，大坪亮介氏が，軍記物研究の立場から歌謡「霊鼠誉」の表現につ

いて詳細な注釈を行い、典拠のいくつかが明らかにされた。

第2回研究会 2009年5月31日 於：大阪市立大学文学部

第一部（『日本の歌謡』を読む）発表者：根来麻子，
「『続日本紀』歌謡」

第二部（『宴曲集』輪読）発表者：岡崎智美，「『宴曲集』巻第五「心」」

第一部は、根来麻子が発表を担当した。『続日本紀』歌謡についてのテキスト該当部分を概説したあと、個別の歌謡を取り上げ注釈を試み、和歌表現には例を見ない表現が用いられていることを指摘した。第二部では、岡崎智美氏が歌謡「心」について輪読を行った。表現の典拠が、和歌のみならず、同時代の軍記物や平安時代の物語にも求められることが分かり、作者層に対しても議論が及んだ。

(3) プロジェクトの予想される成果

まず第一に、これまで特に注視することのなかった歌謡史を概観することで、和歌史を相対化する視点を獲得することができる。歌謡と和歌とがどのように関連するのかを見定めることで、現在までの和歌史を立体的に再構築することができよう。第二に、先行研究の少ない『宴曲集』という歌謡集を緻密に注釈することで、歌謡の典拠が解明され、そこから、歌謡の担い手や披講の「場」にまで肉薄することが可能となる。巨視的・微視的な双方の視点から歌謡を分析することで、これまでの歌謡研究に何かしらの新見地を提供できればと考えている。

*研究テーマ(タイトル)は、より内容に即したものにするため、採用時から変更した

9. 中嶋晋平「戦間期における地方紙の軍に関する報道と世論形成—『京都日出新聞』の軍縮報道を事例に—」

1. 調査概要

本研究は、1920年代のいわゆる反軍国主義の時代から、満州事変以降の軍国主義の時代へと急速に移り変わっていくなかで、当時最大のマスメディアであった新聞が民衆の軍に対する世論形成においてどのような役割を果たしたのかを明らかにすることを目的とする。具体的な作業としては、さまざまな地域で民衆の世論形成を担った各地の地方紙の軍に関する報道について分析を行うことになるが、本年度においては、1920年代から満州事変の勃発に至るまで重要な政治的争点であった軍縮問題を事例とし、研究対象として京都で発行されていた地方紙『京都日出新聞』を選択し、その軍縮に関する記事の収集を計画した。

これまでに、『京都日出新聞』の所蔵先である国立国会図書館関西館において、十数回の調査を実施。ロ

ンドン海軍軍縮会議が行われた1930年を中心に資料収集を行った。現在資料整理を実施中である。

2. 調査結果と予想される成果

本年度は、昨年度に採用されたUCRC研究プロジェクトの成果を、「戦間期における地方紙の軍縮論—ワシントン会議前後の『京都日出新聞』の報道を事例に」と題した論文にまとめた（『都市文化研究』第12号掲載）。この論文は、研究テーマに沿った一連の調査の最初の成果であり、本年度の研究プロジェクトの前節を構成するものである。

この論文の結果、ワシントン会議前後における『京都日出新聞』の報道からは、当初想定していたような「地域性」という視点からの軍縮問題に対する解釈や意味づけ、または受け手に対する提示があまり見られないこと、それよりもむしろ特定の政党の軍縮問題に対する態度や見解と類似する点が多いことが明らかとなった。これらの結果から、当時の地方紙が軍縮問題に対する解釈や意味づけを行う際、どの程度まで自らの「地域性」という立場を重視していたのかについては、さらに継続的な分析を必要とし、本年度のプロジェクトにおいても重要な分析の視点となる。しかし今後は、「地域性」に加えて「党派性」という視点を取り入れた分析についても考慮する必要が出てきた。

本年度の研究プロジェクトについては、現在資料の収集および整理を行っている段階であるが、今後「党派性」という分析枠組みを取り入れることによって、ロンドン海軍軍縮会議の時に発生した、いわゆる統帥権干犯問題に対する地方紙の解釈や意味づけの分析において、より精密な知見が得られることが予想される。

10. 足立匡敏「近代短歌の発生と展開についての研究—佐佐木信綱における短歌革新の解明をとおして—」

(1) 研究目的

本研究プロジェクトは、歌人・佐佐木信綱(1872-1963)による短歌革新の内実を追究し、近代短歌の発生と展開を考える上での新たな視角を得ようとするものである。

(2) 研究内容

信綱は、短歌革新運動の時期について、「明治三十年前頃」（佐佐木信綱『ある老歌人の思ひ出自伝と交友の面影』〈昭和28年刊〉）から始まったと述べている。そして、その運動は「さう簡単に、早急に成就するものではない」（前掲書）と述べているように少しずつ進められ、明治36年に刊行される彼の第一歌集『思草』に結実してゆくと考えられる。

そこで、本研究では、『思草』刊行前後の信綱作品をできるかぎり収集し、その運動の内実を検討する。

また、信綱の短歌には、当時の新体詩から表現や発想を得ているのではないかと思われるところがある。信綱は、正岡子規らと新詩会を結成し、新体詩を創作しており、その可能性は十分にある。信綱の短歌と新体詩との関係についても比較考察を行う。

(3) 調査報告

2009年6月15日のプロジェクト採択決定通知を受け、昭和20年までの信綱の全著作リストを作成し、調査すべき雑誌と著書を洗い出した。そして、現在までに以下の調査を行っている。

①2009年8月8日、17日 大阪府立大学学術情報センター図書館

内容：雑誌『帝國文学』（1巻1号〈明治28年1月〉～10巻7号〈明治37年7月〉）の調査

成果：信綱の短歌を多数確認

②2009年9月1日～11日 大阪市立大学学術情報総合センター

内容：雑誌『心の花』（1巻1号〈明治31年2月〉～8巻9号〈明治37年9月〉）の調査

成果：信綱の短歌、評論文、随筆などを多数確認

③2009年11月10日～14日 大阪府立大学学術情報センター図書館

『女学雑誌』（第1号〈明治18年7月〉～第524号〈明治37年2月〉）の調査

成果：佐々木信綱の短歌、評論文、随筆などを多数確認

(4) 予想される成果

これまでの調査の結果、『思草』に掲載される短歌が、雑誌などに発表された段階では、うたわれた状況を詳しく伝える詞書を伴っていたり、紀行文の中に位置づけられていたりすることが分かってきた。また、改作されて『思草』に収められた短歌があることも分かった。

今後とくにこうした作品の考察を深めることで、信綱がどういう意図をもって『思草』を編集したのか、またどういう歌風の変化が信綱にあったのかを解明することができると思われる。新体詩との比較にも努め、信綱にとっての近代短歌とは何かに迫れるようさらなる調査・考察を行う予定である。

2009年度ドクター研究員一覧

	氏名	指導教員	テーマ
1	オカムラ トシフミ 岡村 俊史	仲原 孝	都市文化研究の方法論
2	タナカ ダイスケ 田中 大介	栄原 永遠男	日本古代都城における市の構造と変遷
3	マキ ゴトウ アスカ 牧 (後藤) 飛鳥	栄原 永遠男	①大阪地域を中心とする陵墓等の文化財の現状についての研究 ②古代日本を中心とした贈位制の研究
4	キタダ ヒロコキ 北田 裕行	栄原 永遠男	中国古代都城の園林に関する研究
5	イザキ フミヒコ 伊崎 文彦	塚田 孝	戦時期における自由主義的知識人の研究 一佐々木惣一の「立憲主義」論と時局認識の考察から一
6	シマダ カツヒコ 島田 克彦	塚田 孝	近代日本における地域社会構造の歴史的展開に関する研究
7	ニシオ ヤスヒロ 西尾 泰広	塚田 孝	近現代日本における地域社会構造に関する研究 一南王子村・八坂町の19～20世紀一
8	ヤマザキ タツヒロ 山崎 竜洋	塚田 孝	近世四天王寺における寺院社会構造の研究
9	ヤマシタ ソウイチ 山下 聡一	塚田 孝	一九世紀周防国三田尻塩田における流通構造と地域社会
10	アマノ タタユキ 天野 忠幸	仁木 宏	統一政権の形成過程と寺社の関係
11	オオムラ タクオ 大村 拓生	仁木 宏	日本中世における大阪湾諸地域の歴史的展開
12	フルノ ミツギ 古野 貢	仁木 宏	中世後期の領域拠点(都市・港湾など)の固有性の解明と武家権力との関係
13	ムライ リョウスケ 村井 良介	仁木 宏	「戦国領主」等の領域支配と都市を中核とする地域経済圏の関係について
14	ムライ キョウコ 村井 恭子	早瀬 晋三	中国唐王朝の辺境地域に対する支配・経営における辺境都市
15	ナガタ タクジ 永田 拓治	井上 徹	漢晋期における歴史叙述の流行と都市社会
16	ムロヤマ ルミコ 室山 留美子	井上 徹	都市からみた魏晋南北朝社会の特質
17	アナザワ ショウコ 穴澤 彰子	井上 徹	『名光書判清明集』からみた中国南宋における都心の人間関係
18	ヤマグチ トモヤ 山口 智哉	井上 徹	近世都市形成期における地方官と在地士人層 一風水伝承からみた紹興新昌県開発の一諸相一
19	ズシ ノブタダ 図師 宣忠	大黒 俊二	中世期フランスにおける異端審問と権力
20	キムラ ヨウコ 木村 容子	大黒 俊二	15世紀イタリアにおける遍歴説教 一フランチェスコ会厳修派を中心に一
21	ハヤカワ ミアキ 早川 美晶	井上 浩一	モルドヴァ地方の教会堂壁画, 通称<コンスタンティノーブル包囲>(16世紀)の研究
22	ウチダ リュウシ 内田 龍史	谷 富夫	現代大阪におけるマイノリティの若者の学歴・職業達成に関する実証的研究
23	アキカゼ チエ 秋風 千恵	谷 富夫	軽度障害者の意味世界を探る研究
24	ツツミ ケイシロウ 堤 圭史郎	谷 富夫	ホームレス対策に関する都市間比較社会学的研究
25	ホッタ コウチ フミ 堀田 (高智) 富美	谷 富夫	エスニシティ形成とそのメカニズム 一エスニック・コミュニティの都市比較をを通して一
26	ヤギ ヒロコキ 八木 寛之	谷 富夫	商業空間の形成過程における都市自営業者の役割に関する社会学的研究

	氏名	指導教員	テーマ
27	フリンリン 傅琳琳	谷 富夫	中国大都市におけるコミュニティ形成に関する社会学的研究 ―コミュニティの機能を中心に―
28	マツダ 松田 いらあ	石田 佐恵子	現代都市における脱身体化とファッション消費をめぐる社会学的研究
29	ヤン インシル 梁 仁貫	石田 佐恵子	植民地都市の記憶をめぐる映像に関する考察
30	ナカジマ シンペイ 中嶋 晋平	土屋 礼子	近代日本における多元的マス・メディア空間の構造的研究 ―軍に関する言説分析を事例に―
31	コバヤシ ソウメイ 小林 聡明	土屋 礼子	GHQ占領期大阪における在日朝鮮人のメディアと生活世界
32	ミヤザキ ゲンタ 宮崎 弦太	池上 知子	都市的心性と関係喪失への耐性 ―友人関係の形態に注目して―
33	ムカイ ユリコ 向井 有理子	池上 知子	異文化への態度と都市文化の心的特徴 ―存在脅威管理理論の観点から―
34	タバタ タクヤ 田端 拓哉	池上 知子	都市的環境がもたらすアイデンティティの複雑化と精神的健康
35	ヒロセ ミチヨ 広瀬 美千代	湯浅 恭正	都市における福祉教育の実践とその課題に関する研究 ―小学校、高校教員への聞き取り調査から―
36	アダチ マサトシ 足立 匡敏	村田 正博	明治期の短歌革新運動と都市文化の発達
37	タカシゲ クミ 高重 久美	村田 正博	小栗十州と化政期の文人たち
38	ネゴロ アサコ 根来 麻子	村田 正博	『続日本紀』宣命の語彙と表現についての研究
39	オウ シュウメイ 王 秀梅	丹羽 哲也	古代日本の言語生活をめぐって ―字訓対応の史的研究―
40	ナワ クニコ 名和 久仁子	久堀 裕朗	都市生活と芸能・文学
41	ヨツモト ナオ 四本 奈央	久堀 裕朗	江戸時代中期にみる都市と芸能 ―上方を中心に―
42	リュウ ケイ 劉 慶	久堀 裕朗	日本の古典演劇と中国古典との関わりについて
43	オウ ヒョウ 王 標	山口 久和	文化的秩序の再建と都市景観の形成 ―中国知識人社会と地域名勝の相互作用―
44	シライ ジュン 白井 順	山口 久和	明代思想の都市文化における受容と展開
45	ヤマグチ ヒロコ 山口 博子	齋藤 茂	18世紀の中国における文人ネットワークと文化活動について
46	タハラ ノリカズ 田原 憲和	神竹 道士	ルクセンブルク語コイナー正書法の歴史的役割
47	イソベ ミホ 磯部 美穂	神竹 道士	都市文化における言語のグローバル化
48	ツジ マサコ 辻 昌子	津川 廣行	フランス19世紀末文化における都市の幻想研究
49	イシカワ ユウ 石川 優	三上 雅子	現代日本における女性の二次創作：コミュニケーションの〈場〉としてのコミックマーケット
50	シバタ エリ 芝田 江梨	三上 雅子	西洋文化受容の観点からみる大大阪の文化、芸能の様相
51	トミオカ ミチ 富岡 三智	中川 眞	ジャワ舞踊史の視座
52	オガワ ヒサシ 小河 久志	多和田 裕司	タイ都市部におけるイスラーム復興運動の展開とそのネットワーク―バンコクのTablighi Jama'atを事例に―